

特 219

174 丁中将西川虎次郎著

# 明石將軍

發行所 大道學館出版部



# 始



特219  
174



明  
石將軍



少年時代の明石將軍

正 誤 表			
頁	行		
一一	四	白旗軍	黒旗軍
一一	四	然も後	然る後
二二	一	達成上を困難來す	達成上困難を來す
二六	二	ヨイドコト	ヨイドコト
二八	二	グイボルグ	グイボルグ
四五	一	座礁	坐礁
四六	一	歴史と基礎	歴史を基礎
六七	一	郡市町村會議	郡市長會議
七一	一	巡視せらるだらう	らの下れを脱す
七六	一	南北縱貫鐵道	南北縱貫道路
八五	一	踏躰	踏躰
八六	一		



少中尉の肥田軍

最後に撮影せられし明石將軍



景途の勳章を手にし開成隊軍

明石將軍自筆の書

大正二年三月十日陸軍記念日に故寺内元帥閣下に贈  
られし遺墨にして令息中將寺内壽一氏之を秘藏す

〇林ノ畫墨ニ了了合息中津寺内蓋一丑々々蘇蘇十  
 大五二筆三月十日製軍臨念日ニ站寺内示幀關才ニ韻

肥不津軍自筆の畫





明石將軍絶筆

大正八年夏著者の母七十七歳の故を以て將軍に壽の  
字の揮毫を乞ひしに偶々病に罹られしも漸く癒えて  
別府轉地前特に書して送らる將軍逝いて己に十五年  
而して我母九十二歳の高齡を以て尙健在せり

而して其母氏十二歳の高嶺を以て尙書并せり  
限取轉世前神の書して茲なる御軍盛にして正平  
字の戦亭を以てひしに則々諒の解を以しと稱く遠く  
大正八年夏春の母氏十歳の高嶺を以て御軍の書

肥前御軍の筆

萬

元徳寺  
印

## 緒言

明石將軍は我國に罕なる英雄である、昔は外國の交渉少きため外國關係の事實は極めて少く、神功皇后、豊臣秀吉の三韓征伐、山田長政のシヤム國蹂躪等を算する位である、然し此等は軍隊を以て攻略に従つたのであるが、明石將軍はそうでない一介の大佐を以て自他共に強大を以て許して居る當時の露西亞を攪亂したのである其智略と其勇氣はとても常人の企て及ぶ所でない、此の如き英雄が我福岡市に産出したのは慥に福岡の誇であらねばならぬ。

然るに明石將軍の實行した事柄を知る人が少い、是は決して世人の罪でない、其事柄が外交上の秘密に屬して居るので世上に宣傳することを憚かつたからである、然るに今日は世界の狀勢も變化したから秘密も自然に解消した、そこで大正十年に將軍の舊友杉山茂丸氏明石大將傳を著し次で昭和三年に臺灣で「明石元二郎」と題する傳記を發行した、昭和五年には將軍の行動を小説化した「煽動大煽動」と題する書籍を實業之日本社から發行した。

「明石元二郎」と題する傳記は故小森徳治氏の著述で歐洲に於ける將軍の活動は將

軍自筆の報告書を基礎として記せしものと云はれて居る、然し上下二冊合して千二百餘頁のもので容易に讀過することが出来ない、杉山氏著「明石大將傳」は明快の筆を以て流暢に書き下したるもので特に歐洲に於ける將軍の活動振を記述せし所は目に見る如き感ありて手、卷を描く能はざるものがある、唯惜むらくは郷里邊では餘り多く購讀されて居ないやうである、而して此書は五百頁のものである、其他臺灣にて出版せられた田澤震五氏著「明石大將」と云ふ小冊子がある、是は六十餘頁の讀み易きものだけれども吾人の最も知りたいと思ふ歐洲に於ける將軍の活動を全部省略してあるのは惜むべき所である。

明石將軍は予等の爲同郷の先輩である、しかのみならず予の少尉任官後世話になつたことが少くない、參謀本部に於てもそうであり又北清事變の際隨伴して北支那に行きしときの如きは種々教示を受けて居る、予が英國や佛國に鳩旅行をしたときも少なからぬ世話になつて居るのである、だから予は將軍の事蹟を世人に知らしむる義務を負ふて居るやうに感ずる、然し此等は予の私情であるが此外尙將軍の片鱗でも傳へねばならぬことがある、或時某氏汽車中にて將軍に對し將軍の歐洲に於ける功勳を頻りに賞揚せしとき將軍曰く、君はそう云ふけれども彼の浩瀚なる日露戰

史に「明石元二郎」なる文字がどこに記せられてあるか全然予の名はないではないかと、然り將軍の活躍は盡く秘中の秘であつた、従て後世に遺される戦史には一語も將軍に及んで居ないのである、然れば私傳になりと記して是非後世に遺さねばならぬ、特に現在の我國は國際聯盟離脱後外國との關係が日に増し複雑になつて居る此際明石將軍が當時の露政府に對し不平黨を煽動して事を舉げしめた事蹟は世人の精神指導の上に於て効果が少くないと思ふ、是予が此書を世に公にし同將軍を青年士女に紹介する所以である。然し餘り大部のものにては通讀して呉れるものが少い依て勉めて簡略に記述して小冊子となし普く世人の一讀を切望するのである。

本小冊子に予の直接見聞せし所は勿論記載して居るけれども主として「明石元二郎」より擧載したのである此點については其著者故小森君に深甚の謝意を表す。

昭和九年四月

著者識

# 明石將軍

## 目次

一、略	歷	一
二、幼年時代	代	四
三、學校生活時代	代	六
四、參謀本部時代	代	九
五、日露戰爭時代(其一)	代	一八
六、日露戰爭時代(其二)	代	二三
七、日露戰爭時代(其三)	代	三三
八、歸朝及再渡歐時代	代	四九
九、朝鮮時代	代	五三
一〇、參謀次長及師團長時代	代	六三
一一、臺灣總督時代	代	七三

# 明石將軍

陸軍中將 西川虎次郎著

## 一、略 歴

元治元年八月一日福岡に生る。

明治九年十三歳にて上京し團尚靜氏邸に寄食し安井息軒の塾に入門す。

同 十年六月陸軍士官學校幼年生徒となる時に年十四。

同 十四年一月陸軍士官學校に入る。

同 十六年十二月二十歳を以て陸軍士官學校を卒業し歩兵少尉に任せられ歩兵第十  
二聯隊附となり丸龜に赴任す。

同 十七年六月歩兵第十八聯隊附となり豊橋に轉任す。

同 十九年十二月戸山學校教官となり上京す。

同 二十年一月陸軍大學校に入學し同四月中尉に任せらる。

同 二十二年十二月陸軍大學校を卒業し歩兵第五聯隊附となり青森に赴任す。

- 同 二十三年參謀本部出仕を命ぜらる。
- 同 二十四年一月參謀本部々員となり第一局に屬す同七月大尉に任せらる。
- 同 二十五年四月郡國子と結婚す、年二十九。
- 同 二十七年二月獨逸留學を命ぜられ直に出發す。
- 同 二十八年二月日清戰爭開始により歸朝を命ぜられ四月歸着す、歸着後近衛師團參謀仰付けられ師團に従つて宇品出帆大連に上陸し、更に旅順口より臺灣に至り三貂角に上陸し爾後各地に轉戦して功あり、八月少佐に進級し十一月打狗出帆凱旋す。
- 同 廿九年五月參謀本部第三部員を命ぜられ九月臺灣、安南及東京地方に差遣せらる。
- 同 三十年二月歸朝す此時年三十四。
- 同 三十一年五月南洋諸島へ差遣せられ米國と比利賓の戰爭を觀る。
- 同 三十三年十月北清事變の爲め清國に差遣せられ十二月歸朝す、著者は大尉にて隨行し將軍は中佐に進むる。
- 同 三十四年一月佛蘭西公使館附武官仰付けらる。
- 同 三十五年八月露國公使館附武官仰付けらる。

- 同 三十六年十一月大佐に進級す、年四十。
- 同 三十七年二月日露開戦せしを以て參謀本部附の辭令を受け同時に御用有之歐洲差遣となる。
- 同 三十八年九月歸朝仰付けられ十二月歸着す、歐洲に在ること實に全五年なり。
- 同 三十九年二月獨逸大使館附武官に補せられ赴任せしも日露戰爭中全歐洲を股にかけ各地に辣腕を振ふたのが礎げとなつて同年十二月に歸朝し歩兵第七聯隊長となる。
- 同 四十年十月陸軍少將に任せられ第十四憲兵隊長となり朝鮮に赴任す。
- 此年春國子夫人逝かれ十二月信子夫人と結婚せらる。
- 同 四十一年十二月韓國駐劄軍參謀長兼韓國駐劄憲兵隊長に補せらる。
- 同 四十三年六月韓國駐劄憲兵司令官に補せられ七月統監府警務總長に任す而して八月には韓國併合を實施せられた。
- 大正元年十二月陸軍中將に進む年四十九。
- 同 三年四月參謀次長に補す。
- 同 四年十月第六師團長に補す。

同 七年六月臺灣總督に任せらる。  
同 年七月陸軍大將に任す。  
同 八年八月臺灣軍司令官を兼ね。十月二十四日正三位に叙し男爵を授けられ同二月十六日福岡に於て薨去、十一月一日遺骸を以て臺灣に歸り臺灣總督府葬を行ふ時に年五十六。

## 二、幼年時代

明石家は藤原鎌足公に出て代々偉人傑士を出して居る、明石氏を稱せしは龜山天皇の朝藤原家長が播州明石に住せしからである。

家長五代の孫明石正風は其女を以て黒田職隆に娶はし一子を擧げたが是が即ち元龜、天正時代の傑物たる如水公である、故に黒田家と明石家は主従關係以外に尙遠く姻戚關係を有して居る。

將軍の父は助九郎貞儀で母は明石家の養女秀子である、元治元年八月一日次男として福岡天神町(松本別邸の向側)に生れた、當時は千三百石の家であつたけれども父貞儀早世の爲惡家扶財産を消費し續て廢藩となつたので、生活困難に陥り家は人

手に渡りて近親の邸内に起居するに至つた、母秀子は二兒即ち兄直、弟元二郎を教養するため頗る苦心せられて居る、武士としての精神教育から論語の素讀まで針仕事に傍に教へられたのである。

然るに將軍の幼少年時代の腕白は一通りでない、一例を擧ぐれば將軍七八歳の頃餘り惡戯をするから親戚の八代利英氏が此腕白少年を吠(カブ)の中に封し込み土藏の中に入れたことがある、然るに中では餘り靜かで泣き聲もしないので反て心配し開けて見れば別に悪びれる様子もなく平氣できよとんとして居た、教養の任に當つて居た從兄の利英氏も反てこの少年を懲らす方法に困惑(コソク)したくらいである。

然し頭腦は極めて明哲で智能人に勝れて居た、風采は甚だ不潔で、いつも涙(ハナシ)を垂らし涎(ヨダレ)を流して居ても小學校では常に第一位である。

明治五年に小學校が始まつたので年齢の揃はない學級である、だから十二、三歳の者も同級である、然るに將軍は九歳でありながら第一位を占めて居たので其の智能の優越と母堂の躰(シヅメ)が行届いて居たことが知らるゝ、將軍は又字を上手に書いた、或る時當時の縣令渡邊清學校視察に來たので、學校では二三の生徒を選び面前にて文字を書かせた、此時將軍も其の選に入り名譽ある揮毫をなし「精神」の二字を大書



した、其の時最後の一畫神の字の棒を引くに筆力餘つて紙面を過ぎて少しも意とせず縣令の休憩所に充てた青疊の上を墨痕淋漓と書き通し得々として居るのには一座の者肝を潰し一驚を吃した。

渡邊縣令は其の後妻として加藤堅武カガムの未亡人を娶つた、此未亡人には連れ子の娘があつたので將軍の此度胸に惚れ込み人を介して將軍を養子に貰ひ受けんと懇望したけれども母堂は遂に應じなかつたと云ふ。

### 三、學校生活時代

石田五六郎氏は當時海軍兵學校に學んで居たが明治八年の夏休暇で福岡に歸省した、其の時明石家を訪ひ「元二郎君ももう十二になるから東京に出して勉強させる氣はないか」と誘ふた、母堂は渡りに船と思ひ「それが出来ることならば是非願ひたい」と頼みこむだ、又當人の將軍は「若し東京へ行つて勉強されるなら嫌いな酒飲んでもお香物喰べてかもわぬ」と云ふのであつた。

石田氏は歸京後之を團尚靜氏に頼み愈々話も決り翌九年春小西小五郎氏の歸省の際同伴して上京したのである、上京後は團氏に寄食し幕末の鴻儒安井息軒の塾に入

學し漢籍を學んだ、此塾中に在つても腕白性は募るとも薄くなることはない、從て年長者から酷どく虐待されて時には喧嘩しぎゆう／＼云はされても平氣で居たと云ふ將軍の幼年生徒となつたのは明治十年六月九日で其動機は明瞭でないけれども當時の幼年生徒は官費であつたことから考へると學資關係が主なるものであつたらうと思ふ。

幼年學校は三個年卒業である、然るに將軍は入學せしとき十三歳未滿であるから三年經過しても十六歳未滿、從て陸軍士官學校に入學することが出来ないので一期後廻しとなり翌明治十四年一月に入學した。

陸軍士官學校の卒業は明治十六年十二月二十四日で同時に陸軍歩兵少尉に任官し歩兵第十二聯隊(丸龜)附に補せられた時に滿十九年八個月と云ふ青年であつた。

陸軍大學校の入學は明治二十年一月二十九日である、本來大學校は隊附後滿二年を經過すれば入學し得るのである、依て幼年生徒時代の同期たる大井菊太郎(大將成元)、仁田原重行(大將)等は已に一、二年前に入學して居る、然るに將軍の入學遅延せし理由は丸龜隊附後豐橋の第十八聯隊に轉任したり、或は戸山學校教官となつたりして居た爲であらうと思ふ、即ち最負ヒイキの引き倒しである。

學校生活間に於ける將軍の惡戯は相當多く人の記憶に存して居る其の主なるものは茶目式である、又穢ないこと洩を垂らす事も士官學校時代迄はあつたやうである然し學科の優秀であつた事、殊に漢文に長して居た事は人の許す所であつた、唯學科ばかりでなく射撃術にも長し機械體操、乘馬術共に得意であつた、又圖畫の綿密にして正確なることは何人も嘆賞する所であつたが然し其用紙を汚して居るのも亦無類である、即ち垢だらけの手でいぢり時には洩を落すので紙は眞黒になつて居るにも驚かされた。

此頃の陸軍大學校は兵學以外に數學、地、歴等も教授して居たが將軍は總てに付て優秀である、特に戰術と數學は最も得意とする所で其數學の如きは砲工兵科の者も後に瞠若<sup>シラへど</sup>たらしむる有様であつた、此等を見れば如何に將軍の頭腦の明哲と思慮の周密であつたかが想像される、しかも他の人の如く閉ぢ籠つて勉強する如きことはない、唯紙屑を咬<sup>か</sup>みながら(一種の癖)書見する位である、即ち將軍は外觀粗野にして無頓着なるも中心には玲瓏玉の如き智能を蓄へて居たことが知られる。

#### 四、參謀本部時代

明治二十二年十二月九日陸軍大學校を卒業し歩兵第五聯隊附に補せられ隊附勤務一箇年の後參謀本部出任を命せられた、此が將軍の師團長になるまで全二十五年間(内十個月間聯隊長)參謀生活の踏出しである、爾後三年間參謀本部第一部員として勤務した。

予は陸軍士官學校卒業後約二箇年間宇都宮太郎中尉(後ち大將)及同期生の志田安吉と共に家を借りて男世帯の生活をして居た、其の際將軍及根津一氏は宇都宮氏の許に度々遊びに來たのである、談話の多くは東亞の問題で如何に當時の空氣が東亞特に支那に著目されて居たかが知らるる、宇都宮大將も智略に富んだ偉丈夫で參謀本部に入りし後印度邊に旅行したこともある、又將軍が日露戰爭中歐洲にて活動されたとき宇都宮大將は大佐で英國公使館附武官であつた、だから英國內の事は宇都宮大將の手腕を借られたことが少くない、是は後章に詳述する。

又此の間の事であるが當時福岡の在京先輩としては將軍の外武谷水城軍醫正、古市龍八郎大尉、大庭雄貴中尉及予等一、二少尉位で極めて少ない、又全國を通して

高級としては草場中佐(彦輔)門司少佐(和太郎)が大津、豊橋に居られた位で大藩たる福岡の出身武官としては甚淋しかった、そこで在京の武官相集り何とかして奨励の方法を講じようと云ふので、明石將軍は古市氏等と懇談を遂げ遂に今日も現存して居る筑前郷友會を組織し筑前出身將校は皆若干の寄附金をなし之を以て後進者の貸費に充つることになつたのである、今日は其組織等多少變更されて居るが其の發起は此の時である。

明治二十七年二月に大尉を以て獨逸留學を仰付かつた、將軍の外國語に巧なることは有名なもので幼年生徒時代は佛蘭西語を學んで居たが其頃から同年生の最上位であつた、獨逸に来ては先づ獨逸語の習學が第一の仕事であつたが將軍は僅々一年足らずの間にすつかり上達したのである、然し日清戦争が起つた爲め歸朝を餘儀なくせられたが、實戦に参加されると云ふので勇躍して歸朝したのが翌年四月三日である。

歸朝後直に近衛師團の參謀を拜命し四月十日宇品港を出帆し十三日柳樹屯に到着するや、講和と云ふことになつた、是に於て一旦は落膽したけれども講和條約の結果臺灣島を帝國の領土内に加へられしかも同島内は匪徒蜂起し四方擾亂の状態だと

云ふので近衛師團を其の討伐に向けられた。

近衛師團の先登部隊は五月下旬旅順口を出發し同月二十九日臺灣北部の一角三貂<sup>ミヤ</sup>角<sup>カク</sup>に上陸した、師團長は北白川宮能久親王殿下で將軍は殿下の手足となりて補佐申上げ各地に轉戦して白旗軍を撃破し全臺靖定<sup>セイテイ</sup>の上打狗<sup>ダカチ</sup>を出帆し凱旋の途に上つたのは十一月二十日である、此間殿下は御徒步にて三貂大岑を越えさせられ基隆に出て御南進の途中御不例に罹らせられ御療養の御暇もなく御不例を冒し竹輿に召させられて諸部隊を指揮あらせられた、しかも暑氣は強く瘴氣池沼に満ちて居る、殿下は御病氣の儘臺南に着せられ汚穢忍び難き一家屋に安臥御靜養あらせられた、けれども遂に薨去あらせられたのは畏多き次第である、此の間將軍は幕僚として御供申上げたのであるから後臺灣總督となり巡視して臺南に到りしとき殿下の御座所であつた小家屋に到り感慨無量、低回去るに忍びなかつたのも當然である。

此間に一挿話がある、上陸間もなく三貂角より瑞芳に山越<sup>コエ</sup>の際暫時休憩したとき殿下の御許しがあつて上衣を脱いで寛<sup>ワカ</sup>るぐことになつた、然るに將軍は上衣を取らぬ、平素は「いの一<sup>ヒト</sup>番」に御免を蒙るのであるが、此日はそうでない、他の幕僚も其の行儀よきに驚いた、畏多くも殿下の御言葉さへかかつたので愈々上衣を取らねば

ならぬことになつた、然し將軍は上衣を脱げば下は素つ裸ハダカである、如何に頓着のな  
い將軍も殿下の御前で素つ裸は恐れ入つた、是には一同は勿論殿下におかせられて  
も破顔一笑遊ばされたと云ふことである。

將軍は此征臺間八月十六日に少佐に進級し引續き參謀職にあつた、凱旋後約半歳  
間は近衛師團司令部に在つたが、翌年五月再び參謀本部に復歸し第三部員を命ぜら  
れた。

明治二十九年九月川上參謀次長(操六)は臺灣、佛領印度の安南、東京地方を視察  
された、其時の隨行者は將軍である、出發前一夕川上次長は將軍を招き心中を披瀝  
し帝國の將來を痛論し諄々として誨ゆる所があつた、此旅行は臺灣を振り出しに佛  
領印度支那より暹羅シヤムに入り、更に南清地方に涉つて詳細に視察を遂げ四個月にして  
歸朝された、後年將軍が臺灣總督の印綬を帯びられしとき頗る得意の色ありしは將  
軍が此視察旅行中に得られし抱負と川上將軍の遺策を實行するの好機を得られた  
からであると思ふ。

予は明治三十一年十二月に參謀本部に入り參謀總長川上大將の宅に始めて伺候し  
たとき、大將は予の將軍と同郷なるを知り將軍に就き其卓越して居る點を擧げて賞  
揚せられた、此の時予は一層將軍の優才を知り且上長の深き信頼を受けて居られる  
ことを知つたのである。

明治三十一年五月將軍は南洋諸島に差遣せられ西、米戦争視察の途に就いたので  
ある、現今比律賓ヒリピン獨立問題などが世界に噂されて居るから西、米戦争の概梗を述べ  
やう。

西歴一八九八年四月米國は玖瑪キュバの獨立を援くる名目を以て西班牙スペインと開戦した、此  
時米國提督は數雙の艦隊を率ゐて香港ホンコンにあつたが大統領マツキンレーの命により麻  
尼拉灣ニラに急行し交戦數時間にて同灣内の西班牙艦隊を全滅せしめた、當時比律賓の  
島民は西班牙の惡政を呪ふて居たから米國の此大捷を見て大に米軍を歓迎した、米  
提督デウエーは比嶋志士シヨウコウの首領アギナルドを招致し速に西班牙の勢力を比島内より  
驅逐し獨立すべきことを慫慂した、是に於てアギナルドは米軍に内應したので米國  
の麻尼拉攻撃は難なく奏功したのである、然るに其後に至り米國の態度豹變し比島  
民の渴望せる共和の理想は破壊せられ、再び外人たる米國の麾下に屈服せざるべか  
らざるに至つた、是に於て米國と比律賓の戦争が起らざるを得ざるに至つたので  
ある。

將軍は此戦争を観るため差遣せられたが出發前約して曰く「麻尼拉陥落せば單に「マニラ」と電報しやう」と是は高價なる外國電報料を節約するの一面には他國に知れない内に日本に通知しやうとの考からである、出發後は先づ新嘉坡シンガポールに足を止め、麻尼拉と連絡し其状況を見て居たけれどもどうも隔靴搔痒カクソウソウキョウの感があるので直接麻尼拉に行くことを決心し「ツ」、マニラなる電報を友人に托し直に出發した、然るに其友人以爲らく「ツ」は餘計の字だ「マニラ」だけにて明瞭するだらうと將軍が出發前約束せしことを知らないから「マニラ」と電報した、東京では約束の通り麻尼拉陥落と信じ直に號外を出し東京市中ばかりでなく全國を騒がせたことがある、然し是は將軍の誤りでなく受托者の親切心から來た過誤であつた。

明治三十三年五月に北清事變が始まつた將軍は少佐で參謀本部に在つたが參謀本部は大本營事務を取扱ふことになつたので將軍も矢張り參謀事務に服して居た、然るに露國は團匪蜂起と稱して架設中の南滿洲鐵道の要所々々に軍隊を配置し滿洲内には一名の外國人も容れない、是に於て參謀本部は有事の際を顧慮し山海關附近を偵察し置く必要が起つたので將軍の派遣となつた、之に隨伴した者は筑紫少佐（後中將熊七）及予である、時は十月二十二日先づ天津に到り三、四日間天津太沽附近

を視察し海路山海關に至りて滞在約二十日或は北方或は南方を視察し秦皇島、洋河口をも實視したが獨り錦州に行くことを露軍が許さない、而して風説によれば露軍は錦州に兵器糧食を蓄積して居る疑もある故に是非錦州及連山灣を視察する必要がある、是に於て將軍は佛國將校を介して露軍に交渉し日本將校五名だけ錦州に行き得る承諾を得て之を實行したのである、滞在間將軍の犀利なる視察眼と判斷力並に外國語に巧なることには深く感じたのである。

山海關附近の視察を終り十一月中旬北京に向て出發した、然るに鐵道は所々破壊せられて未だ其修築を終つて居なひので汽車と乗馬と舟を併用し三日間にして天津に到り更にジャンク、支那馬車及徒歩を併用し四日を費して北京に着した、北京の滞在は僅に四日にして歸途に就き往路を再び山海關に歸り便船を待つて歸朝したのが十二月十九日であつた、此間將軍の努力と健啖には驚かされた、特に炙り豌豆アサリマメを囊に入れて持ち來り時々之を嚙カミつて居られたが是は某藥劑官から教イわられた胃の療法であるとのことである、此旅行中將軍は中佐に進級せられた。

### 五、公使館附武官時代

明治三十四年一月佛蘭西公使館附武官に補せられ駐在員取締を兼務せられて巴里に赴任した、將軍の住むて居る室は四階で眺望の可なるに自慢して居られたけれども不便は甚しかつた、將軍も此頃は餘程風采に注意されて居たやうで昔の不潔な處はなく立派な紳士であつた、又熱心に佛國語を研究せられて何等の差支もないまでに話もされたのである。

予の英國に行つたのは翌三十五年六月で其翌七月佛國の大祭日たる十四日には巴里に至り將軍の世話を受けたのである、又其翌八月九日英國皇帝エドワード七世が戴冠式を挙げられるので將軍は態々倫敦ロンドンに來られた、此時も亦予等の爲何に彼と注意された。

將軍が巴里にて作られた詩に左の如きものがある。

都人追<sup>レ</sup>景弄<sup>ニ</sup>閑餘。滿街紅燈映<sup>ニ</sup>翠輿。吾愛英雄千古月。凱旋門下讀<sup>ニ</sup>兵書。

明治三十五年八月十五日には露西亞公使館附武官に轉任せられた、着任間もなく記念として撮影し之に左の詩を題せられた。

婦女張良定<sup>ニ</sup>大謨。猿郎藤吉畫<sup>ニ</sup>雄圖。何妨異日雲臺上。明石將軍容貌愚。

是は戲作であるけれども自ら抱負の大なるものあるを見得る。

此頃極東の風雲は自ら急なるものがあつた、此際露國公使館に居るのであるから將軍が露語を研究すると同時に露國の内情調査に夜を日に繼いだことは勿論である將軍の助手格で居た鹽田武夫(當時少佐後大佐)と共に諸新聞雜誌を精讀し風雲の嚮ふ所を深く窺つて居た。

掩<sup>レ</sup>耳他家和戰論。鎖<sup>レ</sup>門唯作<sup>ニ</sup>讀書人。徐期大業晚成日。先祝今年四十春。

是は三十六年一月元旦の詩であるが大業の成功を私ヒツカに祈つて居た事が知られる。

露都滯在中は忠實な一老婆を傭ふて炊事は勿論生活萬端の世話を任せて居て又時々露國の内情探究の手先にも使つて居た、此婆さん甚だ強慾で生活用の雜貨を買込み密に之を近所の神さん達に賣付け其代金は自ら着服して居た、將軍の友人之に氣付き將軍に注意したけれども將軍は一向平氣で居た、又或時紙屑籠から十留紙幣が出たと云ふことを聞きし公使館員が之を將軍に擲<sup>ヤ</sup>揄<sup>ユ</sup>すれば將軍は之を打消して居られたけれども事實らしい、要するに將軍の金錢に無頓着であつたことは一生を通じて變らなかつたのである。

或時國際的の宴會席上で一獨逸士官が將軍に對し「貴官は何國と何國の語を話すか」と尋ねた、普通の人なれば己れの話せる丈を並べ立つるが將軍はそうでない、「佛語を少々遣つた丈だ」と答へた、獨逸士官は語を繼ぎ「獨逸語は何うです」と重ねて問ふたから「駄目です、一向解りません」と云ふた、そこで獨逸士官は安心して露西亞將校と可なり重要な機密事件を獨逸語で互に語り會つてゐたのを將軍は少しも解せない風をして耳を澄まし残らず聞き取つたことがある。

### 五、日露戰爭時代(其一)

將軍は明治三十六年十一月に大佐に進級して尙露國公使館附武官であつた、翌三十七年二月上旬日露兩國開戦したので露國公使館は撤去となり將軍の露國公使館附武官と云ふ名稱も自然消滅した、そこで參謀本部附仰付けられ御用有之歐洲差遣の辭令を頂戴したのである、此時將軍は左の一詩を賦して氣焰を擧げた。

城中夜半聽雞鳴。蹴枕窓前對月明。思結鳴江營裡夢。分明一劍斬長鯨。

露都を引上げた帝國公使館は瑞典の首府ストックホルムに移され栗野公使は歸朝し尋いて秋月左都夫氏公使となつた、將軍も共にストックホルムに移住し鹽田中佐

を補佐に使つて敵國の内情探查を續行した。

日露戰爭の遠因及近因に就ては今更述ぶる必要もないが當時に於ける露國の内情につき將軍の調査した所は概要述べ置く必要がある。

露國は北清事變の際北支及滿洲に派遣せし軍隊を三期に分ちて撤去する約束をなしながら第一期を撤去せしのみで第二期即明治三十六年四月には撤兵せざるのみか却て軍事施設を増大する有様である、然し露國の大官が全部戰爭までして自己の勢力擴張を圖らんとするものではない、強硬なる主戰論者は當時宮廷派の勢力者ベゾブラゾフ一味では思ふ存分滿鮮の野を攪き廻さねば氣が濟まぬのである、前陸軍大臣ワンノフスキ、外務大臣ランズドルフ大藏大臣ウキツテ等は勿論陸軍大臣クロバトキン極東總督アレキシエフも寧ろ非戰論者に屬するものである、但アレキシエフは一旦派遣したる軍隊を撤してまでも平和を好愛するものでなく爲し得れば現状のままでは以上深入せぬ條件の下に平和を維持したいと云ふのである、然し三十七年に入つてからは露國閣員は一、二を除く外主戰論に降服したやうである。

露國の虚無、無政府、社會の三主義は其義解に於て諸説あるも其根本たる虚無主義は歐米の無政府主義と酷似して居る、當時の學生にして西歐の文化を追ふものは其

共産的汎愛的哲學の理想を偏信して居た、而して虚無黨は一八七九年に分れて二派となり一を革命社會黨他を民權社會黨と云つた。

革命社會黨は最過激なるもので其主張は (一)國政監督議院の常設 (二)吏員の公選 (三)村制の完全なる自治 (四)集會、演説、出版、選舉の自由、全國民に投票權の附與 (五)常備軍の廢止、地方民兵制の採用 (六)土地の國有等である、而して其實行手段としては暴力を第一義とし決死の士を以て決行團を組織し脅嚇手段を先驅とするもので目的達成の最大急務は皇室を廢するに在りとするものである、チャイコヴスキ。デカンスキ、ソリスキス等は其首領で後章に述ぶるシリヤクスは芬蘭<sup>フィンランド</sup>反抗過激黨の首領又クロポトキン公爵も此黨の一人である。

民權社會黨は主義は前者と相似て居るけれども専ら職工の保護を目的とし又前者の如く威嚇手段を採らぬのが相違して居る、此黨は後述する、第一回の巴里會議第二回のジュネーヴ會議にも参加しなかつたが、此黨に屬するレーニン一派は政府攻撃に對し革命運動の援助を聲明しガボン僧正の變も其内實は此派の側面運動の力與つて大である。

自由黨と稱するも色彩の濃淡に由り差がある、其進歩派は共和制度を主張し國民

の投票權を獲得せんとするもので非常手段を好まざるも中には革命黨の決行組に加擔するものもある、黨中には貴族、學者等上中流の人士が多い。

ブンド黨<sup>ユダヤ</sup>は猶太勞働者の秘密結社で革命運動には何時にても従ふ、特に當時は民權社會黨と全く提携して居た。

アルメニヤ黨はアルメニヤの國民社會黨である、其の目的は完全なる自治を得、進んで其の地方に獨立の行政を行はんとするものでマロミロン其の首領である。

ゲオルギイ黨はゲオルギイ地方の國民社會黨で目的は前者と略相似て居るけれども地方民性關係からヒ首爆彈を弄することもある。

レットン黨も地方の國民社會黨でリボニヤ、リチュニア地方に在る過激黨である、日露開戦前までは著しき運動を見ざりしも開戦後次第に劇烈となり革命黨中最も活潑なるものゝ一となつた。

芬蘭憲法黨は芬蘭が本然に具有する自治權を完全にせんとする純國民黨である、然るに一敗すれば遂に國を誤る危険があるので自重して居る、芬蘭は露國の藩典中最も自由なるものであるけれども近時露國から芬蘭固有の憲法を蹂躪せらるゝに至つたので上下怨恨甚しく露國自由黨中の急激派と親善するに至つた。



芬蘭反抗過激黨は前者と同觀念であるけれども其手段過激にして露國の革命社會黨と結び、革命の目的を達せんとするものである。

波蘭國民黨は芬蘭憲法黨と同じく露政府を仇怨視せるも敢て活潑なる行動をなさず自重せるものである。

波蘭社會黨は専ら波蘭の職工より成立せるもので頗る過激なるものである、目的は任意露國と離合し得べき自治制を作るに在る。

波蘭進歩黨は前二者の一角を拾收して編成せるものである。

小露西亞黨は小露西亞民族の再興を計るを目的として居るけれども其の組織は未だ完全でない。

白露西亞黨も社會黨で地方自治を得るを目的として居る。

ガボン黨は露都の職工間に一種の勢力を有する僧ガボンの黨與で明治三十八年一月二十二日に起した暴動は此黨が核心である目的は革命社會黨と同じく又其運動も彼と共にするのを常として居る。

以上各種不平黨を調査し兼て各黨派の袖領連を知悉し然も後將軍の案出した計畫は此等を利用して露國內の事情を探らしめ尙都合によりては之を綜合して露國內に

革命運動を起させやう、然るときは露國は専念して極東に戰爭することが出来ない  
と云ふに在つた然し夫には此等不平黨に接近することが何よりも急務である。

## 六、日露戰爭時代(其二)

將軍が露國不平黨の巨頭を知り彼等と交遊を開くに至りし端緒は留學生中田信太郎氏を通じ露語教師として傭ひ入れた露國大學生ブラトンからである。

將軍は露都を引上げ瑞典の首都ストックホルムに轉ずるや到着の即日兼て其名を知れる芬蘭憲法黨の首領にして此地に世を忍んで居るカストレンに密書を送り會見を求めた、然るに其使者は空しく歸り來りて曰く「カストレンは確に居た、然るに彼云ふ、明石といふ日本軍人から書面を受くる理由はない、多分人違ひであらうと突き返された」と、將軍も是にはがつかりせざるを得なかつた、是に於て將軍はホテルの一室に閉ち籠り次に取るべき方法を熟考中、其日の夕刻思ひ設けぬ一人の來訪客があつた。客は高帽を戴き白髯を垂れた堂々たる紳士風であるが一封の書を差出したので之を開くと圖らずもカストレンの親友コンニ、シリヤクスの名刺があつた、即ちカストレンに代りシリヤクスが來訪したのである、シリヤクスは露國

革命黨の別働隊として編成せし芬蘭反抗過激黨の首領である、彼は徐に口を開いて云ふ、

「貴名を以て過日伯林より又先刻使を以てカストレンの許に遣された書状は正に到着した、然し貴下に對しカストレンを紹介したのは何人でしたか、又先刻の貴下の使は果して安全なる人物であるか、今日の境遇として萬々安全を期せねばならぬので不本意ながら貴書を返した次第である。

斯くて將軍も一通り挨拶せられ簡単に其意の在る所を述べられしに、彼は語を更め「同志の會合に就てはカストレンも予も大に希望する所である、然し旅店では危険である、請ふ明日午前十一時旅店前に待たれよ、同時刻に必ず旅店前に停止する馬車がある、予は馬車内に居るから貴下は直に之に同乗されたい、見らるゝ如く當地は目下連日の降雪だから幌を下し人目を避けて安全に會合地に行き得る。と其用意の周到なるに將軍も竊に驚き再會を期して別れ翌日時刻の至るを待ちしに約の如く一輛の馬車が來たので同乗して會合場に行つた、其處は即ちカストレンの隠れ家である。

將軍のやり方は常に斯くの如くで一面識もなき敵國人に旅装も解かず面會を求め

又知りもせぬ家に唯一人にて進入する等初めより一身を投り出し危険と云ふ觀念を超越した人でなからねば到底出來得る業でない。

此會合に於て將軍より提出した案が二つある、一は日露戰爭の開始された時局に對し反政府黨の取る方針如何、二は露國に於ける現下事情の通報を得たいと云ふのである、之に對しシリヤクスは答へて云ふ「政事上の事なれば予は悦んで知れる限りを告ぐるが問諜の事なれば我が黨の體面にも關するので引受くることは出來ぬ」と彼は過激派中の最も危険人物である、然るに問諜の媒介は斷然謝絶した處を見れば彼等が如何に政黨の體面を重んずるかが知らるゝ。

然しカストレンは之を抑へ「先ず姑らく待ち給へ、予に心當りがあるから友人に話して見よう」と直に電話にて瑞典の參謀大尉アミノフに協議しアミノフと參謀中尉クリンゲルステルナの盡力にて少尉ベルゲンを露國內に派遣することになつた將軍の戰時諜報勤務は此の如くして始まつたがそれより二年間には想像も及ばぬ苦心もあり又使用せる露國將校にして逮捕、投獄、自殺等もありて涙脆き將軍は歸朝後も猶憂悶の情に堪えなかつたこともある。

將軍はカストレン。シリヤクス等と相識るに及んで將來の大計畫實行上一步を踏

み出したが我が政府より多額の金を送らせ、之を反政府黨の軍資金に使用させなければならぬ、其のための苦心も一通りでなかつた、倫敦に在る公使館附武官宇都宮大佐は能く將軍の計畫を知り其の苦心を察して居たので蔭になり日向になりて之を援助した。

明石大佐の名は是より次第に反露政府黨間に知られ、最早ストックホルムの邊陲にのみ蟄居するを容さなくなつた、是に於て獨、奧、佛、英に旅行し英國にては林董公使の大體の賛成を得た。

六月末頃に至りシリヤクスの運動せし効果愈々顯著となり同志各黨派の關係も相熟するに至つた、其の大體の意向は次の通りである。

ゲオルギー黨は資力が乏しい若し資金を得れば手段方法の如何を問はず聯合動作に参加す。

アルメニヤ黨は共同動作に強ち不同意にあらざるも反政府黨の聯合は反つて露政府側の反動を強くし目的達成上を困難來すを恐る、又他方面より考ふれば各黨派共に主義目的を異にして居るから之を打つて一團となすことは果して可能なるや。

此の如き意見の相違はあつたけれども各黨派間に顔の賣れたるシリヤクスの盡力

により大體に於て好結果を收めた。

將軍は七月下旬シリヤクスと前後して露國反政府黨首領株の淵叢たる瑞西スウェーデンに入りて各黨の連絡を計り、更に獨逸に入りて暫く伯林に足を留めアムステルダムに開かれた列國社會黨會議の狀勢を窺ひ漢堡ハンブルグにシリヤクスと會合した、シリヤクスは一方に於て芬蘭人として主義や人種の地域競争圏外に立ち、他方に於ては虛無黨時代よりの元老として袖領間に親友多く各黨各派に知己を有して居るので主義を異にした各黨派を聯合する媒介者としては最適當者である。

將軍が獨逸よりストックホルムに歸りし當日倫敦の宇都宮大佐から電報を受取つた曰く「來られるならば直ぐ來れ」と將軍は旅裝も解かず其儘又旅に上つた倫敦に到着すれば宇都宮大佐云ふ「波蘭社會黨首領ヨードコー等は同黨倫敦支部員を集め十月の巴里會議は好果を收むる見込なきゆへ初めより參加せざるに如かずと云ふ多數の意見である」と斯くなれば根柢から破壊される恐があるので將軍は己れの意思を同黨員に明示した。

「予はシリヤクスに聯合運動の開始を依頼したのではない、シリヤクス自身が發起者である、予は唯此の如き運動を起すなれば之を援助しやうと云ふたのであ

る、諸君が若し不同意ならば予は敢て慫慂せぬ離合は勝手だ。

と是に於て首領ヨードコトから「熟考する」との言質を得て一先づ袂を別つた。

明治三十七年九月中旬までに各黨概ね出席の旨を通知し來たつたので十月一日に巴里に集合した。

不●參● ブンド黨、露の民權社會黨。

參●加● 自由黨、革命黨、芬蘭憲法黨、波蘭國民黨、同社會黨、アルメニヤ黨、ギ  
ョルギト黨。

レニンは露國民權社會黨の首領で當時瑞西に居つたが此會合には參加しなかつた其の表面の理由は場合に依り威赫手段を取る如きは黨の原則に反すと云ふに在るけれども内實は其競争黨たる革命黨の勢力を嫉視したものではなからうか、特に彼のレニンの如きは此黨中の過激派で政府攻撃に關しては革命運動の援助に努めんとまで聲明したところのあるのである、其上將軍とは日露戦争前から面識があつたのであるから當然參加すべきである、然るに參加しなかつたのは勢力競争の結果と見るのが妥當であらう。

將軍は此運動開始以來七個月、南に北に奔走し數々危険を冒し寢食も安せず露探

に付け狙はれしことも幾度か分らぬ而して今やつと露國反政府黨の大部分を一堂に會することを得た、其人員も數十名に上り眉を揚げ案を叩いて慷慨國事を議して居る、而して其黒幕裡に在つて操縦して居るのは即ち將軍である將軍の胸中果して如何であつたらうか。

會期は五日間でシリヤクス推されて議長席に着き將來の運動法を議定した其の決議の大意は次の通りである。

示威運動は各地各一團となり各得意の手段を以てす、例へば自由黨は其主義とする言論に依て州、郡會を煽動し、革命黨及之と同系の諸黨は得意の非常手段に訴へ、高架斯兩黨の如く暗殺に熟練せるもの、波蘭社會黨の如く示威運動の經驗に富めるものは各之に由る等であつて其地方黨派の一致協力に依り終局の目的を達しやうと云ふのである。

是迄も部分的若しくは個人的に示威運動は行はれたのである、例へば波蘭國民派の首領が滿洲派遣露兵に降參勸告の提案をなしたり一團の壯士が軍隊輸送妨害の爲鐵道破壊を企てし等である、我參謀本部も初めは之を希望したけれども然し此等は結果良好でなく鐵道破壊の如きは僅に一日間の列車往復を止めたに過ぎなかつた、

そして犠牲は多いのである、然るに露國の各地方に互り組織的に示威運動の行はれるやうになつたのは此巴里會議以後である、尙此會議終るや非常手段を採らんと欲する黨派のみが會合して其方法を打合せたが此協議事項中特記すべきは露國各地の軍隊動員を妨害しやうと云ふ決議であつた、斯くて各黨員は十月中旬悉く巴里を引上げ將軍もストックホルムの本據に歸つて靜に各地の狀勢を觀察した。

波蘭社會黨は眞先きに運動を開始し先づ労働者の總同盟罷工を起し激烈なる反抗をなし鎮壓の憲兵や軍隊と鬭争し容易に鎮壓せしめ得なかつた程である。

佛國の露國攻撃示威運動 シリヤクスは巴里に於て同思想の有識者を説得し露國の同盟國たる佛蘭西側より露國攻撃の示威運動を開始せしめんとした此案は元來將軍の企てしものと云はれて居るけれども將軍は毫も關知せずと云つて居る、然し直接に奔走の局に當つたのはシリヤクスである、佛國當時の衆議員副議長、貴族院議員、博士等政界の老傑耆宿も賛意を表し露人の友と名づくる一團體を組織し其機關新聞をして盛に露國政府を攻撃させた、此一派は後項述ぶるガボン僧正の騒動後に於ても更に活動したものである。

露國革命、自由、民權諸黨の運動 革命黨はキエフ。オデッサ。莫斯科等の要地

に於て盛に示威運動を試み又一方大學生を煽動した、自由黨は州、郡會、代言人會醫師會等に言論上より示威運動を試み、民權黨は巴里會議に参加せざりしに拘はらず單獨行動を開始し別働隊となつて職工の示威運動を煽動した。

高架斯の暗殺 官吏の暗殺日々十を以て數ふる有様なりしは彼等の常套手段である。

涅波祭の變 露都に於ては毎年一月ネバ祭を行ふた冬宮の聳へたネバ河畔で行ふもので一に河祭ともいふて居る、祭典には皇帝親臨せられ、百官有司が禮拜し尋いで大僧正が可なり長い説教するので式は頗る莊嚴なものである、然るに明治三十八年一月此嚴肅な祭典中に對岸に在る軍隊の間から卒然一發の砲彈飛び來り皇帝及高位高官の頭上を掠めて冬宮の硝子窓を撃破したのである。

すべて不平黨の露政府に對する怨恨は心身に徹底して居る、革命黨中の最も過激なる女傑ブレシユコブスカヤ或時將軍に語るやう。

吾等は民衆の爲に惡魔と義戰すること茲に數十年、未だ目的を達するを得ず而も今や我が敵國たる日本に依て吾等に惡魔を退治せんとするの機を與へらる、吾等は如何で自己の微力に赤面せざるを得んや。

と實に彼等の胸中に在る唯一の敵は露國皇帝と其政府で此思想は彼等の一味を一貫して居たのである。

ガボン僧正の騒亂　ガボン僧正は日露戦後に於て政府の廻し者であつたことが發覺し革命黨員の爲に露都郊外に誘殺された人である、然し日露戦争當時は革命黨にも民權黨にも屬せないながら一種の革命思想を有する職工間の布教師として尊敬され、兩黨の中間に立て人望を有して居たのである。

巴里會議の後各地方共續々として示威運動起るや革命黨は勿論民權社會黨も之に刺戟せられて煽動漸く進み山雨將に到らんとして風、樓に滿つるの感があつた、此時に當つてガボンは關係深き兩黨の職工間に立ち數萬の衆を率ゐ血を流さざる手段を以て冬宮に迫つた、然し事實は軍隊出動の爲非常の騒亂となり多數の勞働者が死傷して慘憺たる光景を現出したのである。然るに機至らず一敗地に塗れたが外には列強間の大評判となり民衆に對する多大の同情を喚起し、内には一時たりとも冬宮に肉迫して滿都を震撼せしめた點に於て確に一大成功と云はねばならぬ。

ガボン騒動後の示威運動　ガボン騒動後も各地方の示威運動は頻々として起つた東、中、西部露西亞、波蘭及高架斯地方は極力動員の妨害をなし、就中高架斯の

ゲオルギ地方の如きは此動員の妨害を鎮壓するため派遣された歩兵若干中隊をも包圍し、遂に高架斯第一軍團の動員は全く撤回せらるゝに至つた。

波蘭軍團は戰場どころか何處へも動かすことを得ざるに至つた。

芬蘭　若干の地方官が暗殺され人心恟々たるものがあつた。

皇族の暗殺　帝室第一の強硬派であるセルギ親王が爆彈にて暗殺された。

デカンスキ　革命黨中の最有力者なる同人は一日將軍を訪ひオデッサの遊説と

彼の地に兵器揚陸の方法を講ずる運動費と稱し若干金を持ち去つたが六月に至り突如としてオデッサの騒亂が起つた、是は彼の門下のヲメルチユグとフェルドマンが黒海艦隊の一軍艦の乗組員をして内部より士卒を煽動せしめ一揆を起させたのである。

以上の如く反政府黨の擾亂は各地に起り對日戦争行爲の繼續に各種の妨害をなしつつあるに至つた、然し將軍は是のみに満足せず更に進んで第二回の反政府黨會議を計畫した。

明治三十八年の新春はストツクホルムにて迎へたが内地よりの電報に由れば我軍は百戰百勝の有様にて遂に旅順にも白旗を樹つるに至り武勳益々赫々たるものがあ

る、之に反して將軍は遠き歐洲の旅の空で露探につけ廻わされ一日でも一夜でも安心して居ることが出来ない、此苦節は唯天のみ知りて人に話すことも出来ぬ境遇である、左の一絶は此間の消息を傳ふるものである。

三十八年一月偶成

遼水韓山斫賊營。三軍僚友盡功名。愚誠苦節何人識。策竭茫然對月明。

### 七、日露戰爭時代(其三)

ガボンの騷動中將軍は其狀勢を觀望するため四度目の南歐旅行の途に上つた、騷動は失敗に歸したが巴里に於てシリヤクス其他の革命志士と會見し今後の對策に關して協議し先づ斯道の元老チャイゴヴスキに諮り騷動以來俄然有名になつたガボン僧正の名を以て再び各黨の代表者を召集し夏季を待つて一層激烈なる運動を開始することにした。

第二回の會議は三十八年四月初旬に瑞西のジュネーヴに開かれた列席の各黨を始め波蘭社會黨、芬蘭反抗過激黨、高架斯の兩黨、白露黨、レットン黨(バルチック沿岸州)等孰れも非常手段を得意とする諸黨派である、自由黨は參加せざりしも前回に

參加せざりし民權社會黨及ブンド黨も出席せしたため前回より一層内容豊富であつたと云ひ得る、然し議論は容易に協定するに至らなかつた、其理由は堂々たる大黨が一小黨のレットン黨など同一決議權を以て歩調を一にするを好まないと云ふ例の露人根性からである、然るに其後のレットン黨の活動振りは實に目醒ましきものがあつた、然し此等の迂餘曲折の間にチャイゴヴスキやシリヤクスの意見及斡旋が根柢をなして最初の目的通り愈々來る夏季に大々の暴舉を企つるの議を決した。

決議の要領は現政府を倒し各藩屬が獨立して純露と聯邦を組織するか若しくは完全なる自治權を得んとするのである、即ち露本國の革命黨は現政府を根柢より打破して全露に完全なる自由制度を布き各藩屬の聯邦制たるに同意した、芬蘭、波蘭等の大藩屬は露國版圖内にて各獨立し純露と聯邦を組織するを目的とし、白露及レットン黨は完全なる自治權を得るを目的とした、然るに其後に至り此等小藩屬も理想を高め進んで獨立制度を布かんと欲するに至つた、而して此等の決議は機關新聞に依り公然天下に宣言したのである。

自由黨は此等の決議に與からざりしも其首領株のシャウスコイ。ドルゴルキ。兩公爵の如きは後に至り此決議に賛意を表した。

各黨志士は此決議に由り手に唾して期の至るを待つて居たが兼て革命黨の入念に企てし一大陰謀が發覺した爲此隆々たる氣勢に一頓挫を來すに至つた。

革命黨は妙齡の一少女レランチバーなるものを宮廷に配置し暗殺せしめんと企てたが事露はれ家宅搜索となりて遂に多數の革命黨員が逮捕されたのである、將軍が四月末に第五回目の南行をなしたときは革命黨の風雲兒も沮喪落膽ソムラッダシの限りであつた然し浩嘆のみを事とすべきでない、是に於て將軍はチャイコヴスキ。シリヤクスソリスキース(チャイコヴスキの秘書役)、ガボン等と謀り革命黨を中心として既定の運動を開始する手筈を定めた、是に於て黨の幹部を二つに分ち各其目的に奔走させた其の一は露國內に入り沮喪したる不平黨の士氣振作の任に當るのでチャイコヴスキ。僧ガボン。ソリスキース等之に當り、他はジュネーヴの決議に基き目的達成に要する武器購入に奔走した此方はシリヤクス。デカノージ。高架斯ギオルギ(社會黨總務委員)。チエルケツソフ(有名なる政治哲學者)等其任に當つた。

此大暴舉決行の爲先づ必要なるものは武器である、之を露國及列國の目を偷みて購入し且搬送するのは容易のことでない、特に武器も各黨派により嗜好を異にし夫々注文が違ふ、例へば革命黨や波蘭社會黨の如き職工を主とするものは小銃を好ま

ない、農民の多數を有する芬蘭及高架斯等の諸黨派は小銃を歓迎すると云ふ風である、仕方なしに波蘭には金錢を與へて自由に購買せしめ、其他は好む武器を見付け次第代金を支出することにした。

將軍がガボン騒動中南行せしとき波蘭黨の一首領スツテニツキとなる者奥國の維也納に於て將軍を待ちつゝあつた、其用向きは瑞西に於て小銃數萬挺の賣物がある價も廉であると云ふのであつたが、將軍は其際「何れ一考の上」と云ふて別れて居たが愈々銃器の必要を感じるやうになつたので先づ此銃購入の手段方法を研究した、然るに當時高架斯のアルメニヤ黨はサンシャモンで露國舊式武器の購入中であつたので同じ高架斯ゲオルギ黨のデカノージに諮つたならば良い方法もあらうと相談の結果忽ち妙計が案出され同郷の老友政治哲學者のチエルケツソフを介し瑞西の無政府黨員ポトと云ふ金満家に依頼しポトは又同窓の友たる砲兵工廠提理の某大佐に依頼して難なく賣買の契約を結んだ、時は六月中旬でバルチック方面に向ける小銃一萬六千挺、彈藥三百萬發及黑海方面に送る小銃八千五百挺と彈藥百二十萬發を購入したのである。

此間にシリヤクスは漢堡に於て拳銃及マウル騎兵銃の購入に著手し各黨共夫々武



器購入に熱中した、同盟決議に加はらなかつた民権社會黨及ブンド黨も別働隊として是亦拳銃の購買に狂奔する状態であつた。

此の如く各黨共武器の購入に熱中して居るけれども之を目的地に送致することの困難は一層甚しきものがある、露探等は武器に關しては特に神經過敏で其偵察は至れり盡せりである、其一例を舉ぐれば或時將軍が人目を避けて倫敦の場末クレイベ  
ン街の一小旅店に潜んで居た、此處に潜んで居ることは宇都宮大佐の外誰れも知らない筈である、然るに投宿兩三日の後「大佐明石」と書いた女文字の封書が到着した將軍は怪みながら封を開くと、

「足下は次の木曜日午前十一時に佛國巴里ジャンゼリゼー街の地下鐵道入口に我を待たれよ、足下は私を知らざるべきも私は足下を熟知する故に必ず足下を見出し得る、要は必ず足下の爲めに告げんとする事件あればである、私の談話は足下の爲には甚必要である足下は決して恐れ給ふな

と書いてある、其名は佛蘭西革命史に名高きローラン夫人の名を藉りて居る、如何に大膽なる將軍も薄氣味悪るかつたであらう、何者とも知れぬ一婦人が深く潜伏して居る旅店を知り面會を申込むのだから、然しこんな場合に將軍の性格が現はれる

將軍想ふに斯る人間こそ次第に依つては我が用をなさしむるに足ると恰も巴里に至り黒海方面に兵器輸送の相談もあつたので愈々此申込みに應ずる決心をした。

將軍は指定の日、指定の場所に待つて居るとやがて四十恰好の一婦人が近付いて來た、そこで旅館を約し再び其處に落合つた、彼の女の話は次の通りである。

「私は露探の妻であります、私は良人と争ふことがあつて目下別居して居ますが金の入用に迫まられて居ます、若し貴方が私に四百磅の金を下さるならば貴方に取つて大事な露探の秘密を御話しませう」

とそこで將軍は「そんなことなら私は金を惜むものでない、唯十分確實に何事も打明けてもらい度い」と答へられると、彼の女はそろ／＼話出した。

「貴方はご存じですか、露國側では貴方を非常な危険人物と目星をつけて居ることとは……

「貴方の行かるゝ先き／＼は一々露探の目が届いて居ます、露探長のマロニロフはもう今朝の八時に貴方が凱旋門の下をぶらついていたことを知つて「明石が來てるよ」といつて居ました。

「貴方は露國政府の蛇蝎視して居る虛無黨の首領シリヤクスやデカノージと協

議して不穩の企をして居ます。

「貴方は漢堡でフランクなるものから約束の兵器の一部を購ひ一部は失敗に終りました」

流石の將軍も心中穩ならざる所はあつたが猶平然として耳を傾けた。

「〇月〇日貴方は夜汽車で伯林から漢堡ハンブルグに来てシリヤクスの宿のストロイツ旅店の階段を上るとき出遭ふた人のあることを記憶して居ますか、彼はスプリングエルと云ふ露探で貴方がシリヤクスに會ひに来ることを知つて待つてたのです、貴方が立たれた後で彼も倉皇と立ち去つたのですが夫は貴方等の會合の内容を探知し得たからです、爲めに貴方は銃器購入の一部を失敗したのです。

「貴方がジョールジュと云ふ名で〇月〇日にデカノージーに送つた書面は露探の手に入つて開封されました、お望なれば其文句を申しませうか。

「貴方は今も兵器の購買に奔走して居ることは疾ふに知られて居ますが然し其場所が漢堡か何處だか今盛んに探偵中です。

「徒歩はいけません尾行され易い、又貴方は平氣で本名を出されませんがやはりホテルでは偽名をお用ひなさい、それから小さな旅店は却て露探の目が届きます、

大きなホテルになさい。

「今後も猶時々御注意申し上げますが銃器の購買には十分お氣をつけなさらなくてははいけません」

と云ふのであつた、其注意は一々事實に中るので露探の警戒斯くまで周到なるかには衷心驚かざるを得なかつた。

然し彼女が眞に露探に敵意を有し日本側に味方せんとするものであるや否は尙容易に心を許すことは出来ぬ、そこで將軍は先づ憊こういつた。

「予は露國內の探偵たるべきものを得るに苦心して居る適任者あらば御紹介を頼む、虚無黨とか不平黨とか云ふことは大した關係はない、唯露國內の情況を知り得れば結構だ」

彼女は早くも將軍の心中を讀んだやうな顔付で、

「何を仰せられます、貴方が虚無黨を知らなかつたら誰が知りませう、申すとなれば申しません、決して私をお疑なさるな貴方が露國の内政運動をしやうとしても私の力を籍らぬと決して能きませんよ。

「重ねて申します、武器の購買は露探の最も注意する所ですから忘れてはいけま

せん、特に貴方に申しますが日本の暗號は露國側には知られて居ます」  
其後將軍は此佛國婦人を利用したやうである、婦人に關係深かつたとは此邊から出た誤解で實際此婦人と將軍は四回會ふたに過ぎない、そして此婦人は終に其夫から殺されて居る。

前述の漢堡に於ける拳銃購入の失敗と云ふのは斯うである、シリヤクスは四月巴里にて明石將軍と別れ漢堡に往いて二口の銃器を購入しやうとした、然るに露探之を知り危害をシリヤクスに加へんとしたのでシリヤクスは將軍を招いた、將軍は直に漢堡に出懸け露探につけられた、けれどもやつと之をまいてシリヤクスに會ひ其買取方法を聞取つた、シリヤクス出發後將軍は直に一方の契約せる家、即ちフランク方に至りて秘密に買取を終り現物まで見て後、第二の家に至りしに第二の家では「全然知らぬ」と云ふ、そこで將軍は名刺を出し明石大佐に相違なきことを證せしに彼云ふ「實は先刻明石大佐と稱するもの來りシリヤクスと私の間に定め置きし合圖までせしゆへ私は間違ひなきものと信じ銃器を渡したが、今頃は最早船積も了りし頃と思ふ」と是等は皆露探のなせし所で將軍の周圍には常に數名の露探がつき纏ふて居たことが知られる。

將軍は此の如く常に露探に付け廻されて居たから一日も安心することは出來ず其苦心は一通りでない、三十八年六月巴里より伯林に行く途中露探追隨と題して一詩を賦したが之を一讀すれば將軍苦心の状態歴然とし居る。

双鞋音重刺名關。孤杖影寒亞虜山。今夜不知何處宿。明朝晴雨喜憂間。

今夜は何處に宿するか、明日はどうなるか全く前途不明の裡に奔走したのであるが其心中實に察するに餘りがある。

瑞西で購入した銃器は鐵道により何れかの海岸に搬送し更に之を海路運送せねばならぬ、一萬六千挺の銃器と三百萬發の彈藥は少くも貨車八輛を要し船も六、七百噸のものを手に入れねばならぬ、しかも人目を避けてやらねばならぬのだから其困難はとても想像も出來ない。

バルチック沿岸陸揚げ用として兼て不平黨の手に二隻の小蒸汽を購入し船員にはバルチック沿岸の不平黨員を乗込ませて居たが此等の船にては輸送用にならないのでジョングラフトン號を購入した、其購入は高田商會の手を借りしもので其取引先なるワットに交渉し之を仲買人とし倫敦の酒商にて無政府黨員たるデキンソンを買手とし之を米國の無政府黨員モルトンに貸渡す形式にしたのである、而して輸送手

段も高田商會の世話を受けた、其方法は高田商會の倫敦支店長より和蘭のロッテルダムに在る高田商店代理店に命じ瑞西より送り來る銃器を取繼がせ更に之を英國のワットの下に廻送しワットは比律賓のマニラ行と稱し大船に積込みて沖合に出す、其時ジョングラフトン號が沖合にて轉載して北方バルチック海を指して駛走する計畫である、愈々此方法に依りロッテルダム迄は來たが茲に一大困難に遭遇した、夫れは英國ワットの許に送る爲には税關の検査を要するのである、之れが爲一時出荷を停止されたが高田商店とワットの非常なる盡力により英國に輸送することを得た。汽船ジョングラフトン號につき又難關に遭遇した同汽船は兎に角檣頭高く英國旗を翻すことになつたが英國内の何れの港を出るにも行先を届け證明書を得ねばならぬ、然るに同船の乗組員は總て露國人であるから證明書を得ることが出来ない、乃ち船員を買受前の儘として和蘭のフレッシングに向はせ同地に於て讓受けの契約をなし新船員と交代した其他幾多の故障もやつと切抜けて七月末英佛海峡を南航し同海峡の一孤島ゲンゼーの沖にて彼のワットの持船の運び來る銃器一萬六千、彈藥三百萬發、拳銃三千挺を轉載した、此時風浪高く兩船の動搖甚しく船員は幾度か海中に落ちやうとした特に夜間の作業は最も困難であつた、然しジョングラフトン號

の船員は鐵石心を有する一味徒黨のものであつたから晝夜兼行三日にして纔に轉載を終るを得た。

將軍は終始船中に在つて之を指揮して居たが愈々ジョングラフトン號が轉載を終り目的地方に駛走しやうとするとき左の一絶を賦して之を祝した。

功名何必望王公。伸足雄心千里風。成敗任天々似墨。白帆一片怒濤中。

此汽船は八月十四日夜丁抹海峡を通過し十八日ヴインダウ(露國西岸)にバルチック沿岸住民用及莫斯科行きを揚陸し、他は十九日夜ヴイボルグの南方一小島に至り迎への船を待合せ之に轉載し露都附近に揚陸する筈である。

將軍は八月初旬シリヤクス等と別れて倫敦を出發し巴里に來つて高架斯の諸袖領と會見し又伯林に於て波蘭社會黨の首領ヨードコーに會して今後の活動に關し打合の後ストックホルムに歸つた、ストックホルムに留守居役をして居る長尾中佐は云ふ「ジョングラフトン號の向ふべきヴイボルグの南方に監視哨の配置あるを發見したとの電報ありし故取り敢えず着船地を芬蘭と瑞典の間の海岸に変更した」と然し此變更電報が果して到着せしや否は頗る疑しかつた、其數日後シリヤクスの來り云ふ所によれば「ジョングラフトン號はヴイボルグ南方監視哨に發見せられし故揚陸

地變更を命ぜんとせしも遂に同船に連絡するを得ず、數日後同船丁抹に返り來りて云ふ、十八日揚陸すべき銃器は命令通り揚陸した、十九日指定の場所に行きしも迎への船見ゆざりしゆへ疑懼の餘り此處迄引返し來れりと、依て、露瑞國境ケミールネヲ地方より漸次兵器を揚陸しつつ南下することに變更した」と、然るに此地方は平素船舶の出入なく海圖も完備して居ないけれども、兎に角手探り同様にししてトルネヲ他一點には無事に揚陸するを得たが進んで第三地點たるラタン地方に達せしとき遂に此冒險船が座礁と云ふ悲むべき運命に陥つた、是實に九月の初旬にして其事早くも四方に傳り歐洲諸新聞に「不思議なる船」と題し筆を揃はて書き立てた。

地方官憲は早くも不思議なる船の座礁を知り官吏を派して臨檢せしめたから船員は之を捕へて監禁し其間に銃器を揚陸し然る後之を釋放した、釋放された吏員が黙して居る筈なく之を露都に報告したから政府は直に假裝巡洋艦アジャ號を派し所載の銃器八千五百挺を奪ひ去つた。

此事あつて後政府は又第十八軍團の一部を芬蘭に派遣するに至つた、而して此時奪取された八千五百挺の銃器は賄賂に依て悉く取り戻したことは將軍の歸朝後受取りし書信に依て知られたのである。

黒海方面に輸送すべき八千五百挺の銃器を陸送することは殆んど絶望に近い、シリヤクスの説に依れば此方面はポテムキン號の叛亂失敗せし以來露探の數を増して一層監視を嚴にしたから銃器が黒海につかない以前に沒收されるかも知れない、又假りに甘く到着しても今の處恐らく利用することは出來ないだらう、寧ろ之をバルチック方面に輸送する方有利であると云ふので是亦輸送方法を高田商店に托するることとなつたが其結果は明瞭でない。

第二回ジュネーヴ會議後實現せし革命に關する運動は概ね左の如きものがある。

露國宮廷内の穩謀暴露し多數の黨員逮捕せられて一時は氣勢を殺がれたけれども第二回會議後各地方の志士は東西に奔走し力を極めて士氣の作振を圖つた結果高加索にては國立銀行を襲ひ三萬圓を奪ひ波蘭にては社會黨が其地の國立銀行に於て同額の金を奪ひ八月中旬レットン黨も亦同様に二萬七千圓を奪取せし事實がある、又クルランドにては騒動を企てバルチック沿岸の彼等の動亂は次第に猖獗となつて露國政府は遂に第二十軍團を該地方に派遣するの止むなきに至つた。

革命黨は自ら首魁となりて莫斯科に激烈なる争鬭を起し芬蘭は獨立の態度を執り意氣揚々として芬蘭國旗を總督の衙門に翻し、クルランドのレットン民族も亦獨

立を宣言し波蘭は各地方共蜂窩に石を投じたる如く非常手段や示威運動頻々として行はれ鬭争到る所に絶えない、キエフ。オデッサ。高架斯地方も亦之に呼應して囂々擾々たる動亂は實に一個月半に亘つた、但露都ペテルスブルグに於ける運動は他の地方の夫れに及ばぬ、其理由は八月中旬又も革命黨員の逮捕が行はれたからである。以上が即ち歴史上の所謂一九〇五年露國の内訌なるものである。

米國大統領の仲介に由る日露の講和は八月頃から耳にして居たが九月五日兩國全權の調印を終つた、是に於て將軍が大活動を中止して歸朝する期は近づいた。將軍は此際徹底的に露西亞帝國をやつつけて置かねば必ず又東洋に害を及ぼすものと考へられて居たやうである、左の古詩一篇は明かに之を見得るのである。

明治三十八年十月講和

長蛇逸兮長蛇逸。逸作<sub>ニ</sub>黒龍<sub>一</sub>吸<sub>ニ</sub>百川<sub>一</sub>。血痕點々染<sub>ニ</sub>草木<sub>一</sub>。滿喉吐<sub>レ</sub>焰息喘々。  
寶刀離<sub>レ</sub>鞘追<sub>レ</sub>蛇擊。腰組纏綿拘<sub>レ</sub>刃牽。千古光寒秋水色。斫<sub>レ</sub>風帶<sub>レ</sub>露唯空閃。  
長蛇逸去脱<sub>ニ</sub>九死<sub>一</sub>。妖壽更加幾十年。捲土重來期有<sub>レ</sub>日。卷<sub>レ</sub>傷曲<sub>レ</sub>尾姑先眠。  
金鱗遙射貝湖水。鐵骨斜通烏拉嶺。天結<sub>ニ</sub>怪雲<sub>一</sub>地尙動。陰々殺氣乾坤羶。  
師團長時代一幕僚が將軍の此偉勳を建てられし動機に就て尋ねたとき將軍は「あ

れは新聞勉強で出来たのだ」と冒頭して詳細話された新聞は毎日の出来事を細大漏さず書いて居る、其中に歴史もあれば政史もある、戦史もあれば社會史もある、此等を辿れば露西亞の國體のどこに缺陷があるかが見當がつく、而して其現状を見て國民性を知り、又官報を研究して國事犯人の罪狀を知れば自ら何れに向つて突進すべきかと判断せられるものである、兒玉將軍の如き偉<sub>モテ</sub>人でも初めは同意されなかつた、それもその筈だ、敵國の革命を企つるなどは戦術書に書いてないからと説明されたことがある。

## 八、歸朝及再渡歐時代

歐洲に於ける將軍の活動も最早用なきに至つたので九月十一日附で歸朝を命ぜられた、出發前參謀次長宛に郵送せし書面中に左の一節がある、將軍の先見の明を知るに足るのである。

「(前略) 露國の形勢は下官の觀察する所を以てせば目下の紛擾假令一旦靜まるも夫れは時<sub>シツレ</sub>雨日和の此頃と同じ事にて逆も晴天となる見込は烏渡相立申さず長く風雨相續き候事と存候、此後尙まつ黒の黒雲來り可申勿論今直ぐとも申兼候へど

も多少の時日多少の月の中には黒雲も襲ひ來る日あるべきかと存居候云々。  
尙此書面の最後は「總ての罪惡之を限りと致候御一笑被下度候」の一語を以て結んで居る。

斯くて將軍は十一月十八日を以て全五年間滞在し幾回となく其容姿に接したる山河而かも將軍の所謂多くの罪作りし歐洲の天地に告別し十二月二十八日東京に歸着した。

滿洲出征軍は其前日までに大部分凱旋した、凱旋將軍の光輝は燦として視るも嚴めしきものであつたがそれに引換へ將軍は垢染みたる背廣服に、破れ靴を片手に携へ孤影悄然として歩廊に下り立ちたる其見慘めさ、是が極度の難事業を一身に引受け九死に一生を得て五年振りに歸朝する光影とはとても見ることが出來ない、出迎へられた母堂に久方振りの挨拶もそこへ直ぐ其足にて參謀本部に至り一通りの報告をなし殘金の受け渡しを濟ませ然る後赤坂區檜町の自宅に入つたのである。

明治三十九年の正月は久方振り家族團欒して屠蘇を酌んだがそれもほんの東の間で二月三日には又もや歐洲の生活に入らねばならぬこととなつた、今度は獨逸大使館附武官である是は本來將軍の冀望とも云はれてゐるが事は餘りに急であつた、然

し將軍の在任は久しきを許さなかつた、戰爭當時將軍は神出鬼没して度々獨逸にも入つたが其辛辣なる活動振りは歐洲各國の要路に居る人にして知らぬものはない、だから獨逸に於ても將軍を頗る危険視したのである、此の如き状態であるからとても交際場裡に居ることは出來ない、是に於て將軍は其内情を歸朝者に托して上官に打明けたので遂に呼び返すこととなり在任僅に十個月にて歸朝し金澤の歩兵聯隊長となつた。

此僅々十個月の滯歐中に一の功績を遺して居る、夫れは明治三十九年夏季ジュネーブに開かれた萬國赤十字社會議に委員としての活動振りである、將軍は次席委員となり、其提案は芳賀博士と秋山參事官が慎重に起案し當局の承認を経たものである。

一方英、佛、露等の外國側は何れも一流の國際學者である、而して露國は戰敗國ではあるが奈翁對戰以來の大陸軍國であり、英國は現に世界の大海軍國である、此等の學者及強國を向ふに廻し我が主張を貫徹せしめんとするのだから戰捷國たる餘光のみでは素より困難である、是に於て豫め委員の作戰計畫を定めて會議に臨んだ我委員側の花形役者は實に明石大佐と秋山參事官であつて其結果は見事に我が主張

を貫徹し所期の收穫を得是迄名あつて實なかりし情報局の如きも實際の活用を見るに至つたのは全く我が政府提案の行はれた爲である、是は我が提案の内容に於て負傷兵の取扱、捕虜の待遇等列國をして聽從せしむべきものがあつたのみならず之を論じ之を説きし將軍の手腕の大なりしことを忘れてはならない。

將軍の歩兵第七聯隊長となつたのは三十九年十二月二十七日だけれども歐洲より歸り着任したのは四十年の四月に入つた、爾後聯隊長たることは僅に五個月餘に過ぎない、本來隊附の縁のない將軍である、しかも在任僅に五個月如何に手腕のある人でも此短日月の間には何も出来る筈はない、將軍も無爲に此間を經過された。

家在<sub>三</sub>松風蘿月睡。任他詩酒與<sub>レ</sub>心違。乾押一擲曲<sub>レ</sub>肱睡。滿目青山梅雨時。

是は隊附中の作であるが當時將軍の心事が此二十八文字の裡に顯はれて居る。

## 九、朝鮮時代

將軍の朝鮮時代を述ぶる前に朝鮮の概況を一通り述ぶる必要がある、日清戦争には全戦全捷であつた日本も露、佛、獨の三國干涉には脆<sub>モロ</sub>くも敗北し遼東半島の還附となり、日本當然の收穫を露國に奪はるゝに至つた、是に於て事大思想の國民性を

有する朝鮮人特に閔妃は露國側に頼りて親日派を排斥せんとし遂に乙未の政變を惹起し親日派も隱退するの餘儀なきに至つた、是より後は露國公使政治の中心となり李王及世子は露國公使館に移され親露内閣の組織成り露公使ウエーベル總顧問となつた、此間ウエーベルの指し金で露、佛、米に與へし利權は少くない、明治三十二年の交には露國の勢力も一時稍々不振状態に陥つたがアレキシエフの極東赴任と共に駐韓露國公使も更迭して捲土重來し海軍根據地、貯炭所の獲得等に焦慮し終に三十六年夏秋の交には變装せる露兵を韓國北境に進め暴慢無遠慮の行動に出でたのである、事茲に至つては最早我が國も黙視することは出来ない、翌三十七年二月愈々日露開戦となり仁川沖の海戦が開かれワリヤーク。コレイツの二露艦は撃沈され露國公使バプロフ夫妻は悄然として仁川より佛艦に藉りて歸途に就いた、是に於て日韓條約が訂結され韓國保護の基礎が確立して伊藤公の入韓となつた。

此間に突如として一進會の宣言者が發表された、會長は李容九で其主義綱領とする所は「虚榮にあらずして眞に臣民の崇信する皇帝の尊嚴、姑息にあらずして永久の平和を意味する人民の安寧、形式にあらずして實相實體の國家の獨立を期す」と云ふのである。



伊藤公入韓後に林公使より提案し翌日調印せしめし新協約の主なる内容は韓國外交權の讓與、統監府の設立、日韓の親睦、韓國皇帝の安寧及尊嚴の維持等である、此調印終りて後伊藤公は一先づ歸朝し翌三十九年二月一日統監府を開き伊藤公統監に任命された、爾後統監政治は四年七個月繼續したが其間に各種の出來事がある、就中明治四十年六月海牙ヘイグに開かれし第二回世界平和會議の時李王は密使を差遣し日本の羈絆キバンを脱せんと企てしことがある、此使者は露國を經由して海牙に至り議長露國委員ネリドゥを往問し宗主權の恢復を訴へしも撥ね附けられ、轉じて英、米、佛の各委員を歴訪せしも誰一人取り會ふものがない、そこで今度は和蘭政府に會議參列を申入れたけれども許される筈がない、悄悄として歸途に就き米國に於て誣言演説を弄せしも是亦失敗に終つた、是に於て韓國內閣の交迭となり李王の讓位となつた、之が丁未の大政變である。

次で起りしは協約問題ではは明治四十年七月に調印された、其結果帝國の保護權一層確實となり尙擴大せられたのである、即ち官制の改革副統監の設置、韓國軍隊の解散、司法權の委任、日本人の採用、警察權の委任等である、其結果として解散兵の化したる暴徒各所に蜂起し軍隊、憲兵、警官相協力して討伐に努むるも容易に

奏功しない、此形勢の際將軍が少將に進級し第十四憲兵隊長となつたのである。

將軍が此選に入つたのは寺内伯の眼識で寺内伯は將軍が歐洲に於ける活動振りを陸軍大臣として承知して居たからである、寺内伯の此拔擢は如何に將軍を感激せしめたかが次の話で明瞭する、或る時海軍大將八代八郎氏が醉餘盛んに寺内總理大臣を罵倒した。

「陛下の軍隊は未だ曾て一度も大義名分を無視して出されたことはない、然るに今回の西伯利亞出兵は全く無名の師だ、而かも米國が僅に兵員七千五百を出したのに日本は七萬五千といふ大兵を動かして居る、實に怪しからぬ寺内だ、上御一人を欺くものだ、山縣公のやうな聰明な人がついて居ながら山縣公も山縣公だ」と言ふ丈云ふて「明石何ふ思ふか」と顔を覗くと將軍は例の通り黙々として聽いて居たが覺めたやうに口を開いて

「八代實は慙うだ、俺が日露戰爭當時にやつた事に就て山縣公は「明石といふ奴は恐ろしい奴だ」と人に語られたといふことを聞いた、それで俺はもう山縣公にさう睨まれたからには陸軍では前途が止まつた、とても榮達の見込がないと諦めて居た、其時に俺を聯隊長から拾ひ上げてあの朝鮮の大事の位置に据ゑて呉れた

のは寺内伯だ、總理大臣としての遣り方を離れて俺には個人として斯る恩人だ、何うか寺内伯の話はこれで打切つて呉れ」

と其義に堅いことに就て八代大將は飽迄稱揚された程である。

寺内伯の推舉に會うた明石將軍は一寸面喰はざるを得なかつた、憲兵隊長は隊附以上に全然無經驗の仕事である、之を友人に諮れば多くは不賛成で辭退すべしと痛説せしものもある、之を説き立て諄々として勇往を勧めたのは寺内伯である、曰く

「曩に君は全歐の間を馳驅して其政治状態、社會状態を知り悉せり今之に加ふるに朝鮮に入つて刻下の大難業に當り親しく内的社會組織の如何なるものなるかを究むるに於ては眞に後年大成の基礎を定むるものである。

と將軍も此至誠に動かされて愈々赴任することになつた、陸相寺内伯は將軍の出發前送別の宴を設けて桂首相以下内閣諸公を招待せし席上將軍を紹介し將軍の膽略非凡なるを推稱し「此人ならでは政府が所期の政策を實行するに足る人物はない」と云はれた。

第十四憲兵隊は間もなく韓國駐劄憲兵隊と改稱せられ從來の二百八十八名を一躍七百八十二名に増員した、將軍は之を各地に配置し且三月には約二千名に増加し更

に六月には憲兵補助員なるものを創設し韓人中より之を募集した、其數實に三千餘名である、此補助員は後更に四千三百名に増加し各分隊、分遣所に増員したので各地共暴徒は最早手も足も出ぬやうになりて漸次歸順し然らざるものは之を討伐した此れが爲暴徒側の死者は一萬四千五百餘に上つたが憲兵、警察官の死者も日本人百二十七名、韓人五十二名、負傷者日本人二百五十二名、韓人二十五名を出した。

四十二年一月には更に擴張して憲兵一名に對し約三名の補助員と云ふ割合とした從て其本部も倭城臺上に巍然として聳へ立つ赤煉瓦の殿堂となつた、將軍は此頃本職を韓國駐劄軍參謀長に轉じ憲兵隊長を兼ねた、故に陸軍と憲兵を提げて一身韓國の治安維持の實權を握るに至つた、明治四十二年八月には一旦韓國駐劄軍參謀長專任となり榊原少將憲兵隊長に任じたが翌四十三年六月に至るや日韓併合の氣勢次第に濃厚となつたので先づ治安維持に要する憲兵隊改編の必要がある、從來の憲兵隊本部を司令部と改め其下に一個の憲兵隊本部を置き全道七十七個所に分隊を置いた是に於て將軍再び憲兵司令官となり駐劄軍の參謀長は榊原少將に譲つた、又同月警察官制の公布と共に警務總長をも兼ね治安維持の統一を圖つた。

伊藤統監は三年有半曾爾第二世統監は僅に一個年で寺内第三世統監となつた、伊

藤公の統監たる時代より既に日韓併合論が擡頭して來た、然し伊藤公は内心決する所あつても未だ口外する時機でないと思へられて居たらしい、公が北滿洲旅行の途に上るとき某側近者が公の爲危険の虞あるを説きしに公は昂然として曰く、

「韓人にして余に危害を加ふるが如きことあらんか、自ら其國家を危殆に陥らしむるものである、彼等と雖如何で斯る愚擧を敢てせんや」

と之を味ふとき公の意蓋し機あれば斷行に吝ならざるものと見得る、然し第二世の曾禰子は其の死に至るまで併合の意思はなかつたやうである。

明治四十二年十二月韓國にては一進會主として併合を主張し、皇帝、統監及總理大臣李完用に上書し又一面には桂首相にも陳情した、而して我内閣其他樞要の地位にある諸公中山縣公、寺内陸相は積極論で桂首相は斷行の意に乏しい、大隈侯は合併速進論者で板垣伯の説は頗る軟弱の觀があつた、此の如き形勢に於て裏面より其速進を説き決行を勤めて居るものがある、夫れは杉山茂丸氏、内田良平氏、武田範之和尙、其他葛生修亮、菊池謙讓、菊池忠三郎、井上藤三郎の諸氏である、而して此等の人が明石將軍に進言したことも少くなかつたらうと思ふ、此際將軍の浪人觀を紹介しよう、或時側近の一官が將軍を諫めて「あまり浪人をお近かづけなさらぬ

方がよい上司の思惑も如何と思はるゝし經濟にも影響しますから少しお慎みになつて貰ひたい」と云つたとき將軍は容を更め、

「君の注意は有り難い、然し考へて見給へ、彼等は一定の收入あるでもなく恒産あるでもなくほんとに手前辨當で國家の事に奔走して居る、而かもお國の大事に際しては此無給無酬の彼等ならでは到底成し得ないことがいくらかもある、領事や大使館附武官の報告のみを信賴せんとする如きは迂の至りである、故に俺は俺の力の許す限り彼等を保護もし援助もし度いと思ふて居るこれ丈は何人からの干渉も御免だ」

韓國内に於て合邦反對は舊宮廷派及守舊派である、我内地に於ては又、各種の會合ありて合邦輿論の喚起に勉めて居る朝鮮問題同志會の開催、議會に於ける質問等も行はれた。

明治四十三年五月三十日寺内陸軍大臣統監を兼任する辭令が發表された、而して明石將軍が再び韓國の憲兵隊司令官に復歸したのは其二週間の後であつた、寺内統監の著任は七月二十三日で同二十九日は李完用總理大臣となつた、李完用と寺内統監と會見したのは八月十六日で其寺内統監の渡したる覺書に調印したのは二十二日

之を發表したのは其一週間後の二十九日であるが何等の騒動も起らず無事平穩の内に終了した。

此間に明石將軍の劃策したる事は一、二に止まらず、第一は憲兵と警官を統一したる事である、而して憲兵補助員を設けしと同様に巡査補を置き治安の任に當らせた、又併合の際に於ける警備としては軍司令部と協力し水も漏さぬ警戒をした、然るに暗殺の企圖起り或は寺内統監を狙ひ或は韓國主要人物を撃たんとするものもある之に對しても十分の警備をなし纔に事なきを得たのである、然し當の將軍は一回も暗殺者の狙ふ所とならなかつたのは何人も奇蹟とする所である。

其他衛生、道路、植林等にも心を用ゐた當時の東洋拓殖會社副總裁たりし野田卯太郎翁が「朝鮮の禿山<sup>ハゲ</sup>を今日のやうに青くしたのも明石、兎も角も道路らしいものを造つたのも明石、是<sup>せ</sup>と信ずれば眼中官なく民なく一目散に突進する男」と評して居る。

尙將軍の在鮮中にやつた新しき試みの一は警察犬の飼養である。在獨逸大使館に依頼し牡一頭、牝二頭を輸入し一警官を專屬として飼育せしめた、今は經費の都合で廢せられたのは惜しきことである。

ある時京城に暴動起り白衣の暴徒京城衙門に群集し口々に喚<sup>ウチ</sup>き立て手に々々投石した、日本官憲も到底軍隊の手を借る外なしと考へ將軍に相談せしに將軍云ふ、

「いや好い工夫がある、撤水用のポンプで泥水を放射してやれ、それも群集の頭の上にかげずに先頭に居るものゝ前にかけてやれ、それも折々でよろしい」

と副官は手ぬるい事と思ひしが憲兵司令官の命令通り實行した、白衣群の中に高聲を擧げしものありしが俄にどよめき出して退散しかけ遂に解散し盡したのである、其時將軍之を説明して云ふ、若し彼の中に鐵砲の音でもさせやうものなら彼等は自暴自棄となるからとても少數の憲兵で防ぎ得るものでない、兎に角彼等をおこらせないやうにするのだ、夫には一番困ることをやればよい、彼等は白衣と云ふ弱點を持つて居る、予は此の弱點を利用しただけなのであると將軍の奇智は萬事に抜け目がなかつた。

將軍が歩兵少尉となつて軍人生活に入つて以來大正八年十月臺灣總督として終る迄其活動時代實に三十九年其間最も花々しかつたのは日露戦争時代の歐洲に於ける一年半と朝鮮時代の約八年である、其年齢も四十より五十に至る男の働き盛り而して其舞臺も列國環視の中に在りて經綸劃策の人となり最も得意の場面であつた。

一〇、參謀次長及師團長時代

大正二年十二月を以て陸軍中將に陞進したる明石將軍は猶朝鮮駐劄憲兵司令官の職に留つて居たが翌三年四月を以て參謀次長に轉じた、將軍を此地位に導きたるは歐洲の戰雲が次第に濃厚となつたからである、日本の陸海軍部内には歐羅巴通は夥しい、然し獨逸に長く居た人は獨逸通となり佛蘭西に長く居た人は佛蘭西通と云ふ風である、將軍だけは歐羅巴全土を股にかけしかも暗黒面を政治的にも社會的にも研究して居る故に此際將軍を參謀本部に呼び返したのは適材を適處に置たものと云はねばならぬ、而かも當時の陸軍大臣は朝鮮總督を兼ねたる寺内伯、其上長たる參謀總長は嘗て朝鮮軍司令官たりし長谷川大將なるを思ふとき將軍の參謀次長は當然であつたことが首肯される。

其後間もなく寺内伯内閣を組織し岡市之助中將陸軍大臣となり大嶋健一中將次官となつた、大嶋、明石、兩將軍の間には常に圓滿なる熟議が行はれた、之につき大嶋中將は左の如く述べて居る。

「日獨戰爭の際の如きは明石は參謀次長として余は陸軍次官として役所の歸りにどちらからも互に寄り合つて種々の謀議を運らしたものだ、機密に互ることは一切彼れが引受け其調査研究には實に慘憺たる苦心を重ねたのだ云々。」

日獨戰爭の際明石將軍は雷に參謀本部の帷幄に在つて劃策を作せるのみならず、自ら大連を経て戦地に至り實地を視察した、青島戰爭は夏から秋で雨が多い、其上支那は嚴正中立と稱して車輛人夫を一切徵發に應ぜしめない、従て作戰の進捗上大支障を來し兵站を管掌して居た高柳大佐(後中將)も大に苦心したのである、將軍は此話を聞くや言下に「人夫のことならば大連の相生に頼むが宜ろしい」と是に於て關東都督府陸軍部に依頼し關東州内に於ける車輛を徵發し大連福昌公司(相生の商店)の使役せる苦力を青島に送る等總て關東都督府陸軍部及民政部を煩すこととなつて此支障を切り抜けることが出來た。

日獨戰爭に關し大嶋中將は左の如く述べて居る。

「青島を難なく攻落し得たことは無論第十八師團出征の功には相違ないが其内部には長谷川參謀總長を輔佐するに明石次長があつたからである、恰かも朝鮮併合の際寺内統監に對する明石憲兵司令官のやうな關係であつた云々。

明石將軍は常に人目につかぬ隠れた仕事が多い、幼年學校時代の同窓山田中佐は將

軍を評して左の如く云つて居る。

「大抵のものは上長に引張り上げられて大きくなるが明石に限り反つて上長を助けてそれを大きくする」

參謀本部には將官演習と云ふのがある、是は參謀總長の統裁が立前であるけれども參謀次長に代らしむることも少くない、明石將軍が統裁せられた、大正三年の同演習のとき演習員たる少將連は心竊かに想ふ、明石次長は是まで參謀本部員とか大公使館附とか又は諜報勤務とか警備事務とか特別勤務のみに従事し隊附の經驗と云つては金澤に於ける僅々十個月位のものだ、それも明治四十年といふ昔のことである、然るに今回は自ら統裁するのであるから如何で此大任を全ふことが出来やうと、半ば嘲笑的氣分であつた、然るに實際の指導振りを見るに巧に大綱を把握して統裁流るゝが如く些の澁滯をも見ない、演習參加者は勿論見學者孰れも舌を巻いて感嘆措かざるものがあつた、之を見學せし一戸大將は感嘆の餘將軍を評して「彼れは何んでも出来る、あれなれば陸軍大臣でも總理大臣でも出来やう」と、然し將軍も此統裁には頗る苦心せられたのである。將軍は徹底的に研究する人であるから演習の指導上臍に落ちぬ處があれば眞夜中でも厭はず自ら補佐官の宿舍を尋ねて仔細

に之れを質し聊かも手落のないことを期したものである、此等の點より見れば、將軍が如何に周密なる思慮の人であつたか、知らるゝと同時に其努力には感ぜざるを得ないのである。

將軍の參謀次長在任中の出来事は歐洲戦争が最大で又之れがため參謀次長となつたとも云ひ得る、當時日本は聯合軍に屬し日英同盟を尊重するのが當然である、然し聯合軍の旗色はあまりよくない、そこで議論は三案に分れ聯合軍側に屬する案と新進の獨逸に加擔しやうと云ふ案と今一つはどちらにも加擔せず、無關係で居ると云ふ案である、然るに將軍は第一案を取り之を主張した、當時將軍の草せし論文中に次の如く云ふて居る。

「思ふに獨逸は今日迄あらん限りの努力をなせり、而して其爲し得たる努力は其平素の涵養の力なりといふを得べきも、其鐵石の如き愛國心も尙且自然の苦痛に堪へ得ざるの時期至るなきか、是れ聯合軍が開戦の當時より期待し居る所にして戦局の或は茲に歸著するも亦計り知る可らず云々」

尙將軍の大戦觀を述べれば次の通りである、將軍は哲學的の見地から到底戦争は人間界に於て絶滅し得べきものでないとの信念を有し、平和會議とか國際聯盟とかは沙

上の樓閣である、所謂文明人は口に永久の平和を唱ふるも或は學術に於て、或は産業に於て、或は貿易に於て夙夜鎬を削り競争して居る、是が世界戦因の伏在する所である、又人力を以て人情を強制せんと試みたる諸約法は利害の問題に逢著しては一點の効力を認めずと云ふて居る、然し極端なる主戦論者ではない、唯戦争は生存上到底避け得べきものでないから國家の健全なる生存の爲には常に國防の充實を圖らねばならぬと云ふのである。

又將軍は對戰國の必要條件として次の條件を數へ之を同盟、聯合の兩軍當時の現狀に照し批判を試みて居る。

- 一、舉國一致。
- 二、忠君愛國、神威神德尊崇の念。
- 三、國民皆兵の觀念。
- 四、意志の鞏固、即ち攻撃精神の強硬。
- 五、兵器の充實。

有事の際舉國一致の必要は論を俟たない、日露戦役に際し露國が倉皇として和を急ぎたる所以は單に奉天と日本海に於ける陸海軍の大敗の故ばかりでなく、それは

露國の反政府黨が三十七年十月巴里會議後俄かに動搖を始め舉國一致どころか國內到る處騷擾又騷擾終に政府をして安んじて國外の戦争に従はしむるを得なかつたからである、然し舉國一致は言ふに易く實現は極めて困難である、或は言論家などが俄に聲を大にしても効果を擧げ得るものでない、眞の舉國一致は多年の訓練に依つて國民の心情を陶冶し得たものが機會に遭ふて發現し國民全般を一貫したとき始めて舉國一致と云ひ得る、我が元寇の役に於て龜山上皇を中心として各地の武士が一致結合したのは即ち是である、カイゼルはフレデリック大王に私淑し久しき間訓練を行つて居る、然し他の同盟諸國と事を共にするのだから決して容易の事ではない、然し聯合軍の一致を欠きて往々不覺の敗北を招きし如きことはなかつた。

舉國一致は忠君愛國を核心とせねばならぬ、獨逸は長き間其國の歴史と基礎とした訓練をなし敬神崇祖を以て國民を安立せしめた、獨逸皇帝登極の初め頻りに各地に寺院を建立したのも此精神に出でゝ居る。

今日の戦争は常備兵の數を問ふより其國の總人口幾何なるやを問ふ時代となつた畢竟國民は皆兵である、一旦有事の際は國民總動員の準備があらねばならぬ。

意志の薄弱なる軍隊は勝利を期するを得ない、獨逸が開戦の劈頭白耳義の中立を

蹂躪し、潜航艇を活躍せしめ、ダムダム弾を使用し、毒瓦斯を兵器に加へし如き之を人道的外交的に解すれば決して稱すべきではないが、己に國家の存亡を賭しての大戦であるから飽迄捷たねばならぬと云ふ其意志の鞏固は連戦連捷を得し所以である英國は外交には成功し巧に各國を聯合側に引入れ遂に伊太利迄も己れの味方となしたけれども意力に於ては缺けたる所ありて勝利の觀念に乏しい、又佛國は其將士の實力は敢て獨逸に劣るものではない、唯國風として己れの國境を防げば足る、敢て他國に侵入する必要はないと云ふ消極的思想、即ち攻撃精神の缺如が畢竟不成績を招きし所以である。

聯合軍の兵器は甚しく缺乏して居た、之れが爲頗る狼狽し他國より廢物同様のもの迄買入るに至つた。以上の諸原因は今日獨逸側が連戦連捷して居る譯である、けれども持久戦となればそう行かぬ、外周の諸國と交通斷絶されし爲國力次第に衰へ遂に同盟軍の敗北に歸すべきものであると觀じた、故に「鐵石の如き愛國心も尙且自然の苦痛に堪得ざるの時期至るなきか」と警告したのである、而して後五年にして此豫言適中するに至つた。

參謀次長を免ぜられ第六師團に轉任したのは大正四年十月四日である、即ち參謀

次長たること僅に一年有半である、是には何か裏面の理由が伏在して居つたに相違ない、大井大將の言に依れば「一方に明石の地位を狙ふものが出て明石には經綸がないなどと云ふものがあつた、それで私は明石に注意しやうと思つて居ると、其内に第六師團長説が傳はつた、憊うなつては私も黙まつては居れず、明石に事の眞否を尋ねると、彼は案外平然として長谷川さん(時の參謀總長)が行けといふから行くさと別に不平の色もなかつた、私は此時明石も餘程圓熟したと思つた」と然し將軍は此地位に満足して居たかどうか甚疑問である。翌年肥筑の野に久留米第十八師團と對抗演習のあつたとき一詩を賦し總理大臣にして意氣最投合せる寺内伯に贈つた。

綠水洗<sub>レ</sub>馬醫<sub>ニ</sub>平生<sub>一</sub>。蘇山風雨不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>情。肥州面目纔留<sub>レ</sub>影。鞍馬空嘶銀杏城。

「平生を醫し」と云ひ又「情に勝<sub>レ</sub>ず」など幾分悲哀の調がある、而して自ら加藤肥州に比し空しく銀杏城裡に蟄居するを啣<sub>カ</sub>つを見ると決して満足でなかつたことが想像される。

如何に其地位に不満があつても職務に忠實ならざる如き將軍ではない、師團の事務に就ては自ら大に究むると共にまた能く下僚の言を容れ其所信を行ふに於て一步



も躊躇しなかつた、當時の第二十三聯隊長たりし佐多中將曰く、

「師團長の時は久し振りの隊附故固より一兵卒の動作にも不案内であつた、然し大に研究せられ後には隊務にも頗る精通せられた、それには雨天でも夜間でも豫後備兵の演習でも出来る丈出場して研究せられ親切丁寧に且忌憚なく講評せられた、又宜いと思ふことは必ず斷行せられた、嘗て大演習のとき我聯隊は前衛歩兵となつた、其前日東北方の山地に一小部隊を進むるの有利を意見具申せしとき師團長は予を招かれ詳細に説明を求められ其有利なるを知るや、直に之を實行せしめられた、其爲め作戦を容易ならしめたことがある。

此時代に於て最も心血を漑がれたるは在郷軍人の訓練である、由來將軍には一種の在郷軍人論がある。

「在郷軍人會の目的や甚だ良し、之れが盛大を期するは軍國の要務なり、唯其維持及召集には更に政府の盡力を必要と信ず、聯隊區司令官、在郷軍人會支部長は之れが爲多大の苦心をなし且大方の助力を求むるに忙殺されて居る、故に自治機關に於て之れが維持費を醸出し、又召集を助くる如く地方官憲に責任を課するこゝとが必要である。

此の如く在郷軍人會を重視して居たから熊本縣内の郡市町村會議には自ら臨場を求めて大に其主旨を唱道し、又在郷軍人の軍服調製を奨励し遂に軍服を有せざる在郷軍人は一人もなきに至つた、此強制的奨励に就ては將軍に一の所信がある。

「凡そ一事を成さんとせば其間に必ず苦情や理窟の出るものである、之を一一顧慮しては何事でも完成するものでない、故に是と信ぜば極力之を決行する外な  
ら。」

此奨励の理由は一旦緩急あるときはどうせ長びくのであらう、従て多數の國民軍を召集せねばならぬ、其時は縞でも紺でも木綿でも何でも軍服に調製せねばならぬ、此場合在郷軍人が軍服を持つて居たなら非常に都合がよいと云ふのである。

將軍は又熊本城の保存につき盡力せられ私情の忍び難きを忍んで斷然公事に盡され今日迄も其遺徳を傳へて居る、時の熊本市長は依田少將である、依田少將は將軍と同憲でしかも依田少將は少し早く獨逸に留學し明石將軍は遅れて獨逸に行つたのであるから下宿萬端の事まで依田少將の世話を受けたことがある、そんな親しき仲だけでも公務上の事には私情を挟まぬ將軍の立前だから遂に二人の間に一つの大問題が起つた。

或時依田市長から市の淨水池として熊本城内の一部を借り受けたいとの相談があった、市長の考は城内は廣いし、明石は親友であるから二つ返事で承諾を得るものと心竊に期待して居た、然るに何ぞ圖らん、斷然之を撥ね附けた、市長は師團長の返答が餘りに簡單であるから却て例の諧謔と思ふて著々仕事を始めた、然し夫は冗談でも諧謔でもない極めて真面目な返答であつた、そこで市長は窮地に陥り大阪城の例を引いて頻りに承諾を請ふた、將軍曰く、

「大阪城は一時天下に號令したとは云へ畢竟一臣下の居城にして終には落城の歴史を有するものである、豈に之を天下の名城にして、而かも先帝の御稜威の下に赫々たる偉勳を有する熊本城と比すべけんや」

と斷乎として其請を容れなかつた、此の爲依田少將は進退<sup>キョ</sup>谷まり終に市長の地位を辭するの止むなきに至つた、別に臨んで將軍は少將の手を握り「請ふ公私の別を誤る勿れ」と懇々慰諭した、曖昧なことを云へば却て人を誤るといふことを信條として居る將軍としてはさもあるべきことである。

大正七年春の移動のとき師團長中先任の將軍は當然第一師團長に轉すべき順序であるのに他のものが第一師團長となり將軍は其儘第六師團長である、だから世上に

は怪訝の眼を以て見る人もあつた、將軍自身も聊か不可解の念を懷かぬでもなかつた、時の陸軍大臣大島中將は私に内意を傳へ他日大に働いて貰ふつもりであると漏した、其言が事實となつて同年六月六日に臺灣總督に任せられた。

### 一一、臺灣總督時代

従來の臺灣總督は大將か有爵者である、然るに無爵の中將が拔擢せられたのは此時代に於ては破格であつた、然し陸軍大臣の内意もあつて赴任したのは大將に昇進して後即ち七月十六日である。

着任に先だつて將軍の臺灣統治に對する意見は概ね左の如きものがあつた。

統治策に就ては過去二十三年間漸進主義の下に資本的植民政策行はれ着々健實なる發達を來し偉大なる効果を收むるに至れるは誠に悦ぶべきことである、又臺灣人政策に就ては朝鮮の同化政策と稍々其趣を異にすべく要するに恩威兩つながら其宜しきを期するに努力することが肝要であらう。

殊に地理的關係より南支、南洋經營策源地として最も重要な位置にあれば國策の遂行上は勿論南方熱帯植民地經營の試験地ともなるべき一大使命を有する領

士といふも敢て過言でないと思ふ、畢竟此言は必要なる各般の施設と改善とに依りて達成せらるべきものなるが之れが政策の如何は今茲に言明することが不可能である、云々

尙將軍の親友杉山茂丸氏の將軍に進言せられし臺灣統治策は臺灣民族を帝國皇化の民となすを第一急務とする旨を述べ、次に臺灣の地理的關係より 明治天皇の宣べさせ給ひし「臺灣は東洋平和の心臓部」の聖旨を奉體して一朝有事の際は最後の一人迄臺灣を守らねばならぬ、故に特別會計となし政治を獨立させられたのであると云ひ、尙治民に就ては左の四項につき開陳して居る。

- 第一 出來得る限り租税を軽減すること。
- 第二 出來得る限り新利源を開き政費の根本を培養すること。
- 第三 教育の基礎を定め徒に本國制の教育を強えざる事。
- 第四 世界の趨勢に鑑み漸次人權を認むる事。
  - 一、豫告政治 先づ民族中の耆老識者を選び之を召集して政治方針の豫告をなす事。
  - 二、訓示政治 政治の要旨を懇篤に訓示して常に政治上の豫備思想を養ふ事。

三、諮詢政治 事件を限りて諮詢し取捨は總督の權限とする事。

四、採決政治 事件を限り多數採決法によりて政治の一部を行ふ事。

將軍は一々之を首肯せられ尙之を感謝せられたが後臺灣に於ける將軍の統治振りは杉山氏の意見を容れられし點もあつたやうに見ゆる。

明石將軍は第七代の總督で男爵安東貞美大將の後を承けられたのである、着任後三日にして西部九廳下巡視の途に上り歸府後開かれたる廳長會議の席上にて述べられし訓示の要旨は左の通りである。

臺灣の施政は克く島民を感化し帝國臣民の資性を具備せしむるを目的とす。

臺灣は交通の要衝に當り且土地膏腴なり、國利民福の増進に怠るべからず。

内地人と本島人は和協一致し彼我の間に障壁を存すべからず。

蕃民の馴致には緩急寛嚴を適宜に案配すべし。

國防には其職責を有するものもあるも必要の幫助を怠るべからず。

將軍は常に協同一致を中心として指導せられたが其最後即ち大正八年六月の廳長會議に於ても尙協同一致を強調せられ官民の協同、内地人と本島人の一致は最も意を用ゐられし所である。又改革は漸進主意、實行は徹底的、而して言には訥、行に

は敏を要求せられて居るが、此等の事は將軍自ら履み行へる所を以て部下に要求せられたのである。

將軍着任の翌日府内を巡視せられた民政部の計畫では新總督は軍人だから軍部に重きを置き民政部は形式的巡視だらうと豫想し民政部三十分、陸軍部一時間と豫定した、將軍の民政部に到着せらるるや電話にて陸軍部に通知し今より十五、六分もせば貴部を巡視せらるだらうと、是に於て陸軍部では幕僚以下一同門内に整列し今か今かと待てども、其影を見ず、一時間半も経過して猶巡視がないので使を民政部に遣はせしに、民政部に於ける局課長に對する將軍の質問は詳細を極めいつ果つべきや知るべからぬ状態であつた、暫らくして愈々陸軍部を巡視されたが豫想に反し極めて簡單に一巡し、各部の報告も聞かず唯參謀部にて「斯る狹隘なる室にて數年間執務し來りたるは御氣の毒なり、職務關係は後日更めて聴取せん、折角努力を望む」とて萬事各官を信頼する意を明にして辭せられた、此等は時間を有せざりし故でなく軍部の内容は何れも大差なき故幕僚に信頼し唯一瞥すれば足る、然るに其他の機關に至つては未だ實情に通ぜざるゆへ長時間を費して巡視せられたので其間常人の付度し得ざるものあることが知られる。

尙管内巡視中の將軍を紹介すると某守備隊の檢閲のとき晝食準備に牛肉と芋の煮込を副食物となせるを見て守備隊長に「何故豚を用ゐぬか」と尋ねられた隊長は「當隊の兵士は豚は喰べませんから」と答へた、將軍は直に近傍に居る兵に向ひ「お前は豚は嫌ひか」と尋ねられると「嫌ではありません」と答へた、將軍は更に他兵に同一の問をなし同一の答を得た、是に於て將軍は何も云はず隊長の自省に任せて其場を過ぎた。

然し將軍の初度巡視以來廳長、島民共に生々した氣分となつた、當時の島情は「物云へば唇寒し秋の風」で何事も沈黙主義、事勿れ主義で唯一身の安全を圖るに汲々たる有様であつた、然るに將軍は各廳長に對して種々の質問を發し應答を促し又民間有力者の所見を叩いて折衝を怠らない、其結果官民共に自信と勇氣を起し心あるものは從來の梗塞を打破り上下開通を期するに至り瑞兆全島に漲つたのである。

新竹廳下を巡視して故北白川宮殿下御遺跡地に記念の植樹をなし、當年の通譯であつた吉野利喜馬氏が師團司令部露營地の跡など説明せしとき、

「此處だつたかなア緒方(當時の中佐參謀)と一所に敵の累々たる死屍を踏み越へ戦線視察に出懸けたとき穴の中へ足を踏み落した、チカツとしたから彈丸が中つ

たのかと思つたが其穴が地蜂の巢で酷く螫されたことを覺て居る云々」  
との追懷談が出た。

臺北刑務所を巡視せられ少年受刑者等が教師より學科の教育を受けある状態をいとも深き慈の眼を以て眺められ、次で病監に入つては特に仔細に病種等を質され、工場に在りては作業の種別成績等に格別の興味を以て續々質問せられ、鋭敏なる視察眼は頃刻にして構内に遺憾なく透徹した、聽て休憩室に入るや直に質問を發し、

「受刑者の年齢は何歳位が最も多きや、」

所長は「平均二十四、五歳位が最も多數で御座います」と答へしに、將軍は、謹嚴なる面上に一抹の暗雲を漂へ「ハア」と云ひて暫し沈黙せしが聽がて重々しく、

「それは誠に相濟まぬことである」

と獨語せられた、然し何故相濟まぬか隨員にも解し得なかつたが、將軍の意は今や既に領臺二十餘年を経て居る、然らば今日二十四、五歳の青年は領臺後の出生者であらねばなぬ、それに現在の受刑者が帝國臣民として生れし者に多いとありては、誠に相濟まぬ譯である、將軍は常に此の如く國家的に觀察せられたのである。

又蕃界を視察せられ、鳥逕獸路を辿り或は轎にて或は徒歩にて突破せられ、各地

にて教訓的視察をなし一一將來の用意に關し教へられた、又阿里山を視察し澎湖島にも渡られた、澎湖島馬公棧橋擴張工事は多年の宿題で應よりは年々稟申したものである、然るに是迄經費多端の故を以て削除せられて居たが、將軍は此際之を解決せんと欲し直に現場を視察し潮汐の關係其他各方面に涉つて實視し細大の質問をなし深く攻察して研究し、國防上及貿易上より擴張の必要を認め、即座に決定して、本件を認可すべき旨を總務長官下村宏に打電せしめた、將軍の熟慮斷行は當時官民共に敬服措かざりし所である。

將軍が東部巡視中鹿野村に至るや、最新洋式農具トラクター二台を路の傍に置き目に觸れしむるやうにした、將軍いかで之を見遁すべき直に臺車を止めしめ軍刀を脱して卸り立ち降雨頻りなりしも顧みずヒラリと打乗り運轉を命じた、技師は一生の光榮と心得操縦を始めたが場所は蕃地で身長も没する鬼萱生い繁りしかも雨に濡れて車輪にからみつき唯空轉するばかりであつた、技師は今日は雨天の爲斯く空轉する旨上申すると將軍は笑つて、「百姓は雨が降ると仕事ができぬものかなア」と云はれた、此徹底的なるには誰れも驚かされたのである。

臺灣の教育問題も多年の懸案で當局も久しく頭腦を悩して居たが此難問題も將軍

時代に解決せられ大正八年一月教育令となつて發布されたのである、由來殖民地教育は各國共に難事とする所で、英國の印度教育も其高等教育は特殊の上流階級のみに限つて居るのだから印度不穩の根柢は教育にありと云ふ説が出る位である、將軍は茲に見る所あり、特に當時の臺灣人教育は専門教育として醫學、工業ある外には中學一個ありしのみである、然るに新教育令は内地人教育機關を初等教育、高等普通教育、師範教育、専門教育、實業教育に分ち本島人教育機關も同一の分類となし同一の取扱をなしたのである、但し語學の關係上内地人と本島人は同一學校に收容しなかつたけれども、其翌大正九年四月よりは國語に熟練せる本島人に限り内地人と共學の途をも開いたのである。

臺灣森林令も將軍の在任中に發布したのである、臺灣の七割は山嶽林野であるから之れが善用は島民の富力増進に甚大の關係がある、是に於て森林令を發布し林野取締職員を配置し以て臺灣林政統一の基礎を樹立せられた。

司法三審制度も領臺以來の大問題である、内地は勿論朝鮮も三審である、然るに臺灣に在る爲に同じ内地人も三審の恩典に浴することが出来ぬ、又本島人でも對岸支那にあれば領事裁判を経て長崎控訴院、大審院の三審を受くる道がある、然るに

臺灣内のみ二審を以て終審とするのは合理的と稱し得ないので大正八年九月に律令第四號の公布を見た。

臺灣海岸線と稱するは縦貫本線の鐵道新竹州竹南より岐れて海岸を廻り本線中の追分に合するものである、然るに此線は島民一部の激烈なる反對運動をなせしものであるから時の總督も斷行し得ざりし所である、然るに將軍は此鐵道が島政上有利なるを見るや斷々乎として實行に向て邁進し「若し臺中市民が過激なる行動に出るならば當方も武裝してかゝれ」の言を以て鐵道局員を激勵し強硬なる支柱となつたのである、將軍が内地の大演習を陪觀して歸臺するや、當日臺中の有志數十名官邸に押し掛け五時間も陳情した、其時將軍は晝食もせず黙々として聽きありしが最後に曰く、

「數時間に瀾る諸氏の熱誠なる陳述は諒とするも余は臺灣總督として臺灣全般より見て斷じて諸氏の希望に副ふ能はず、然れども余は臺灣總督なり、決して臺中を忘るゝものにあらず」

と云ひて少しも動かかなかつた、是が同線の架設されし所以である、此海岸線の起りし本線中山手線と稱する部分は傾斜強く牽引力乏しく滯貨山積の有様である、而して

時は世界大戦の影響を受け荷物は激増して居る故に海岸線を作り之を圓滿に運轉せしめんとするものである、若し此線成立すれば臺中縣下特に山手線附近は自ら疲弊するは已むを得ざる所である、然し是は一部の利害にて全體より考ふれば海岸線を必要とするのみでなく臺中は相當に發達すべき素質を有して居る、鐵道部長新元鹿之助氏は茲に見る所ありて熱誠以て之に當りしも可否の議論は全島に互りて喧傳せられた、然し將軍の此確固動かすべからざる大決心ありて遂に成立したものである。

日月潭水力電氣事業の實現は將軍が在任中最も心血を注ぎしものであらう、目的は全島中最長河川たる濁水溪の水を臺中州下にある面積五千四百萬平方尺の廣さを有する湖水日月潭に導き之を一大貯水池として其水の落差一千八十五尺、毎秒平均九百立方尺の放水力を利用して最大十四萬馬力の大發電所を作り、安價な電力を以て臺灣内に種々なる工業の起るやうにしようとするのである、其資金は四千八百萬圓を要し工事には約五年を要するので初めは官營案なりしも西伯利亞出兵等の支障ありて容易に成立しない、若し之を民營とすれば利益の關係上自然電力を高價にせねばならぬこととなる、此の如くして遂に將軍時代となつた、將軍も初めは官營

の考なりしも公債等の關係にて事情官營を許さず遂に官民共同經營の形式として一大株式會社を設立し大正八年七月三十一日に創立總會を開催するに至つた、六月九日株式募集の公表せらるゝや應募者殺到し内地に於ては四百十倍。臺灣にては百倍の熱狂的盛況を呈したのである而して其價格は未だ拂込まざる前の權利に對してすら四十餘圓の市價を生ずるに至つた、此時將軍は高木社長に語るには、

「電力株の景氣が好いとのことであるが、俺の友人だとか親類だとか云つて株を欲<sup>\*</sup>しがるものがあるかも知れないがそんなものには一切取合はないで呉れ」と如何に將軍が公平無私で又金錢に恬淡であつたか知られる。

然し此工事も種々な故障に遭ふて一時中止したけれども今日又再興氣運に遭遇し工事を始むるに至つた。

嘉南大圳工事は臺南州下に在る十五萬甲歩（一甲歩は二千九百二十四坪で約一町歩に相當す）と云ふ廣大なる不毛の土地に灌漑排水の設備を施し之を良田化せしむる計畫である、臺南州下の曾文溪と臺南、臺中兩州の境を流るゝ濁水溪の水を引き官佃庄、烏山庄に於て其上流官佃溪を締切りて最大貯水量五十五億立方尺の一大貯水池を築き、一方には烏山嶺に隧道を穿ち曾文溪の上流より溪水を導きて官佃溪流

域の雨水と共に此處に貯水し、必要に應じ、排出給水の方法を採らんとするものである、此貯水池と云ひ烏山嶺の隧道と云ひ其類例内地にも見ざる所で難工事中の難工事である、其工費は約四千二百萬圓、工事期限六個年の豫定である、初めは大正八年から工事に着手する豫定であつたけれども政府豫算の關係上一個年延期となつた、然るに地方農民は之に甘んぜず一日も實現の速なるを切望し一甲歩に就き二百圓迄の金圓を提供するから急速着手して貰ひたいと嘆願したものの、數實に六十五件一萬一千五百人に及んだ。

將軍は國家の事業は成るべく廣く利澤を住民に與ふべきものであると理想して居るので、此大事業も勉めて潤澤の範圍を廣くする意味で工事部の剩餘金一千二百萬圓あるを幸として政府は相當の補助を與へて利害關係の團體をして全部の工事を實施せしむることに決した、然るに將軍は其工事に着手せざる以前遂に不歸の客となられたのは遺憾の極である、然し此事業は大正九年七月臨時議會を通過し同九月より着手したけれども種々の故障ありて昭和五年に完成したのである。

將軍の任に臺灣に就くや最も心血を傾注したのは國防問題と南支、南洋に對する經濟發展策である、故に就任後間もなく調査委員會を組織し南支、南洋の施設に關

する事項を審議せしめた。

將軍は雲南、廣東地方と常に連絡しあるを必要と認め山縣少佐(初男)の雲南にありて唐繼堯と密接の關係を有して居た、又爪哇スマラン等に關し或は人を派遣し或は機を得て講話せしむる等南洋の智識を普及せしむるに努力せられしことが少くない、彼の華南銀行、南洋倉庫會社、新南支、南洋航路、對岸支那病院等將軍在任中に成れるもの若しくは計畫せられしものである。

道路の開鑿にも常に深き考慮を拂つて居た、南北縦貫鐵道も明治二十八年領臺當時工兵隊の手に依つて軍用道路として開鑿せられしもので其後若干の改修新設せしむるも不完全たるは免れない、此不完全なる道路の大改修に着手したのは將軍の總督たる時代と云ふても過言ではない、將軍は單に交通産業の發達を圖ると云ふばかりでなく實に國防の見地より其必要を認めて居たのである、故に賦役も課し保甲を行使し無理算段して架橋もさせたのである、又蕃地縱斷大道も將軍の快力亂麻を斷つ的手腕により出來たのである、而して一面には地方官の自力開發をも促された。

其他にも幾多の事業を遺されたが一年半にも満たない短日月の間によくも斯く種々の大事業を仕遂げられたものである、畢竟中心に一定の大方針を有し事に當りて



は熟慮斷行し聊かも躊躇しなかつたからであると思ふ。

又將軍は支那全體に關し常に觀察を怠らなかつた、左の一書は大正八年六月十二日附にて軍醫監武谷水城氏に贈られし書簡の一節であるが、將軍が如何に對支關係につき遠大の觀察力を有して居られしかゝ知らるゝ嗚呼將軍をして今日に在らしめたるならば對支關係對歐米關係にさぞ巨大の力を添へられたことであらう。

袁愈々斃れ黎はあれども力なし、國務卿段祺瑞南京將軍馮國璋等是足利末の三好松永然たり上越の不識庵入道は張勳にしては餘り滑稽過ぎる織、豊、徳は寧ろ東瀛千里の外に求めざる可らざる歟兎に角變轉又變轉走馬燈の如く候。

## 一二、將軍の薨去

將軍は大正八年五月二十七日東京より歸臺し翌々二十九日東部臺灣視察の途に上つた、基隆灣頭を出帆し蘇澳スオウに立寄り花蓮港に上陸し東海岸各地を視察して臺東に到り大武より海拔四千有餘尺の浸水營越ニを轎に揺られて枋寮に下り阿猴より歸北したるは六月六日で、其間僅に九日である、特に浸水營越ニ當日の如きは行程十里時は炎暑の盛り、路は烏涇獸路の險にして壯者も困難とする所であつた、而して歸

府後は中央政府と打合せも濟み正に滿腔の經綸實行の第一期に入らんとする準備に忙殺されたのである。

六月二十五日夜將軍の體溫三十七度四分を感じたので周圍の注意により服藥就寢した、然るに其翌日は平熱となり七月一日大戦記念大觀兵式當日に及んだ此日は三十七度四分の體溫を見しも之を押しして式場に至り式を終りて退場した、此夜は總督官邸内に各國領事等を招宴したのだけれども將軍は下村總務長官に代理せしめた。

七月二日は體溫三十八、九度三日は四十度五に進みインフルエンザより肺炎を誘發したものと診斷せられ翌四日は危篤状態に陥つた、其夜嫌イヤがる注射をなしたためか翌五日より漸次輕快の徵を見六日には西瓜を食する氣分が出る位となつた、此間多數の親近者は臺灣神社に祈願を籠こめ圓山臨濟寺では一山の大眾大護摩を焚きて祈願し下村長官は臺灣神社に日參し杉山茂丸氏は伊勢大廟に祈願するなど全島内は勿論内地に至る迄其全癒の一日も速ならんことを祈つたのである、又將軍病中の囁語は悉く國事に關するもので時々支那問題など口走り少しく意識を回復すれば下村長官を呼んで公務を語る有様であつた。

在京夫人令嬢令婿等は十日に到着された、翌早朝臺灣神社に參拜し然る後面會せ

られたが輕快の状を見て愁眉を開いたのである、然るに十四日午後八時再び惡兆を發し體溫三十八度五、脈搏百十二を算し意識溷濁し時々囁語を發し再び警戒を要するに至つた、然し此度は翌十五日午前一時半に至りて沈靜に歸したが注射回數は四日よりも多數に上つた、此日より快方となり二十日には危險状態を脱した。

是より先き將軍危篤の報天聽に達するや見舞として葡萄酒を下賜せられた、八月十日之を頂戴することとなり羽織を着け病床を下り藤椅子に凭り下村長官、堀内博士其他を前にし「今日全癒して此天恩に浴するは稀有の幸福者なり」と挨拶して頂戴した。

九月一日は床拂ひをなし官民有力者約七十名を招待して祝盃を舉げ九月十九日には大病後始めての外出をなして北投温泉まで行つた、斯くて愈々體力も回復したので大演習陪觀を兼ねて別府に轉地療養に出懸けることとなり十月九日全快の披露と暫時の別れと云ふ意味で茶話會を開き二百五十餘名を招待した。

十月十三日は將軍が内地へ轉地する當日で將軍は和服を著し夫人、令嬢等と別の馬車に乗り臺北驛に至り特別列車中の人となりて基隆驛に至り、午後正四時信濃丸に搭乘せられたのである。

著者は當時第十三師團長として越後高田に在任して居たが、將軍が別府に轉地せられしことを傳へ聞き左の一絶を寄せたが將軍は遂に別府に至らず薨去せられたのは遺憾の極である。

朝浴<sub>ニ</sub>靈泉<sub>ニ</sub>夕海風。樓頭打坐接<sub>ニ</sub>圓穹。病間時秉<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>椽筆。描出傳神不倒翁。

海上の第一日、第二日は何等の事なく第三日は少し便秘の模様あり、第四日即十六日午前七時六連島にて檢疫を濟せられ再進航のとき朝食の案内ありしも容易に食室に入らず、末松副官の催促にて食卓に就きし後も食慾不振の模様にて且平素の如く話もなかりしが船室に入りし後突然痙攣を起し大苦悶を始められ全く夢中の如き状態となつた、堀内博士は腦溢血の發作なりと云ひしが約二時間の後容態漸く沈靜し意識稍々明瞭となり、自ら浣腸を望まれ便通後氣分宜しとして安眠せらるゝに至つた。

武谷博士は尿毒症より來りたる一時の發作と見て手當する方適當ならんと診察せられ翌十七日擔架にて門司に上陸し福岡大名町松本別邸に至りて療養せられた、到着後一日を間し十九日に手足に痺れを生じ口も利けなくなり、人事不省に陥り昏睡状態の儘二十四日に至り危篤の域に入り二十六日公然薨去を發表し、近世の英雄臺灣總督臺灣軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵明石元二郎五十六歳の生涯

茲に終焉を告げた。著者の拙作を左に、

輓柏蔭將軍

英資落々宏眉宇。靈腕摠宜文與武。南北建勳新版圖。斷腸袖浦濛々雨。

十月二十九日將軍の靈柩は松本別邸を發し博多驛より門司に到り、亞米利加丸にて臺灣に歸り、十一月三日臺灣總督府府葬を以て臺北三板橋の墓田に葬つた、又其遺髪を福岡橋口町勝立寺先塋の傍及東京芝青松寺内に葬る。法號は少林院殿柏蔭自得大居士である、此法號は日置默仙禪師の謚りし所で、柏蔭は生前より用ゐし雅號である、此雅號は圓山太嶺禪師(牧雲道人)の贈りしもので、太嶺禪師は將軍の曾て師事せし人である、將軍は禪道を修め數々禪師と禪の問答をなしたことがある、依て最後に將軍が太嶺禪師と應酬せし詩の一を記して終りとなす。

無字拈來身亦空。心頭何處有西東。一聲飛雁破天地。轉眼老松寒月中。

牧雲道人<sub>ニ</sub>之に次して左の一絶を賦す、

脫<sub>ニ</sub>落身心<sub>ニ</sub>空亦空。痴人多見<sub>レ</sub>問<sub>ニ</sub>西東。忽然振轉閑機境。劫<sub>レ</sub>塞偷<sub>レ</sub>營一瞬中。

明石將軍(畢)

附錄

筑前琵琶歌

明石將軍

著者作

蓬萊と

古來傳へし臺灣に

其名中外に高かりし

二葉の頃より柅<sub>せん</sub>檀<sub>だん</sub>の

時の縣令ゆくりなく

數名の生徒を選び出し

少年明石は悠然と

其筆勢は鋭くも

黒く染めたる縦<sub>たて</sub>の棒<sub>ぼう</sub>

名總督と謳<sub>うた</sub>はれて

明石元二郎大將は

薰<sub>かほり</sub>ゆかしく秀でけり

小學校を訪<sub>おとづ</sub>れて

席書<sub>せきご</sub>命せし其時に

精神の二字を書き下す

紙にあまりて青<sub>あざ</sub>疊<sub>たふら</sub>

得々として引き延す

縣令始め居ならぶ人々  
 かくて將軍十三歳  
 船路遠くも三百里  
 花と呼べる、陸軍の  
 磊落なるも思慮深く  
 皇國の爲めに身を忘る  
 戰雲急を告げければ  
 ストツクホルムに居を構へ  
 花は異國に咲くとても  
 散るべき命覺悟して  
 祖國の危急救はんと  
 巧にかたらし彼の國に  
 もとより命がけなれば

アツト驚嘆したりけり  
 母に名残を筑紫瀉  
 帝都に學び青年の  
 將校とこそはなりにけれ  
 忠義に凝れる魂は  
 時しも日露兩國の  
 將軍露都をあとにして  
 ひそかに護國の策を練る  
 大和櫻は武士道の  
 散らさぬ心けなげにも  
 露國の不平黨員を  
 血の雨降らす荒療治  
 毒に毒もる奇策もて

大膽不敵のはなれ業  
 カストレン宛書を送る  
 髯に霜ふる一人の紳士  
 名刺をひそむるシリヤクス  
 「今は何事も語るまじ  
 馬車差し向くれば貴殿には  
 さらば」と云ひて歸り行く  
 いづれになるも時の運  
 あくる朝は白金の  
 びたりと止るホテル前  
 乗れば一鞭空に鳴り  
 野越の山越え行く先は  
 あやししく住ぶカストレン

憲法黨の首領株  
 折から夜陰に訪づれし  
 肅然差出す手紙の内に  
 挨拶かわし聲ひく、  
 明日の午前に一臺の  
 無言のまゝに乘らるべし  
 謎面白き海と山  
 まゝよ一夜は高野  
 降る雪ふかく幌の馬車  
 これぞと將軍うなづきて  
 馬は蹄の雪けむり  
 冬の木立にはなれ家  
 シリヤクス等の頭株

將軍一人と對座して  
 雨か霰か龍雲の  
 將軍ぐつと膝進め  
 飛んで火に入る夏の蟲  
 望の程を打ちあけん  
 國交已に斷絶す  
 貴國の内情こまやかに  
 心の底を語るべしと  
 威嚴に壓されカストレン  
 秘密の鍵を打ち開き  
 驚天動地の謀り事  
 時を窺ふ策に出で  
 今日けふは英國明日は又

互にねらふ瞬間は  
 渦巻き起さんけはいなり  
 言葉静かに「我は今  
 命をすてゝ君がたに  
 今我國と貴國とは  
 此際貴下等の方針と  
 聞きたる後に我も亦  
 泰然ゆるがぬ磐石の  
 シリヤクス等も感激し  
 額あつむる密談は  
 彼等は黨員結束し  
 將軍自ら神出鬼沒  
 フランス獨逸とかけめぐり

同志糾合につとめたり

隻鞋音重刺名關（隻鞋音は重し刺名の關）

孤杖影寒亞虜山（孤杖影は寒し亞虜の山）

今夜不知何處宿（今夜は知らず何れの處にか宿せん）

明朝晴雨喜憂間（明朝の晴雨喜憂の間）

やがて第一次の不平黨  
 續いて起る總同盟  
 疾風迅雷脚下の  
 ゆらぎ出せるネバ祭  
 闇をつんざく砲彈に  
 亂麻の風にもむ如し  
 とよさか昇る朝日影  
 つゞく勝鬨勝軍

聯合會議は開かるゝ  
 示威運動や罷業等  
 くづるゝ音に露西亞國  
 轟然一發冬宮の  
 百官衆庶の狼狽は  
 彼に引かへ我が國は  
 金色の雲ゆたかにも  
 さあれ將軍其人は

國の譽をよそに見て  
夢地に通ふ故里の  
祈る心のやさしくも

遠き異國の旅枕  
母の身の上幸あれと

年ごとに枝葉はえゆく老松の

千代かけ祝ふ君がことぶき

和歌を詠して書く紙に

ほろりとこぼす一と雫

多情多感は英雄の

常とは云へど將軍は

其半生を外國に

淋しく暮して君國に

一家諸共捧げ來し

其身は走馬燈籠の

五十六年うつし世を

逝いで歸らぬ神の國

知るも知らぬも今に猶

惜む涙はつきぬなり

惜む涙はつきぬなり

陸軍中將西川虎次郎著

### 滿洲國一覽(滿蒙はどんな處か)

定價金貳拾五錢  
送料貳錢

陸軍中將西川虎次郎著

### 新解女大學

定價金貳拾錢  
送料貳錢

九大教授 醫學博士 下田光造著

### 異常兒論

定價金貳拾五錢  
送料貳錢

發行所 大道學館出版部

九大教授 醫學博士 下田光造 著

# 神經衰弱とひすてりい

定價金 參拾錢  
送料 貳錢

九大教授 醫學博士 大平得三 著

# 長命術

定價金 貳拾五錢  
送料 貳錢

陸軍中將 西川虎次郎 編纂

# 興國吟詠集

定價金 拾錢  
送料 貳錢

發行所 大道學館出版部

昭和九年六月五日印刷  
昭和九年六月十五日第一版發行  
昭和九年六月三十日第二版發行

明石將軍奧付

定價金 貳拾五錢  
送料金 貳錢

著者 西川虎次郎

編輯兼發行者 福岡市藥院堀端一番地 古山正朔

印刷者 福岡市東職人町十八番地 大隈龍介

印刷所 福岡印刷株式會社

發行所 大道學館出版部  
福岡市藥院堀端一番地  
電話四七八六・振替福岡二〇五四三番

發行所

9.7. 2

終